

---

# 淫魔の香気

---

まんじゅうX

！18禁要素を含みます。本作品は18歳未満の方が閲覧してはいけません！

タテ書き小説ネット[R18指定] Byナイトランタン

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「ノクターンノベルズ」「ムーンライトノベルズ」「ミッドナイトノベルズ」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または当社に無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

淫魔の香り

### 【Nコード】

N5919CH

### 【作者名】

まんじゅうX

### 【あらすじ】

エルフや妖精達が住まう静寂の森。そこで起こった異変とは、温厚な彼女達が性的に人間を襲い始めたことだった。淫魔ハンターであるアレクはその原因の実態を探るべく調査に向かう。彼を待ち受けていたものとは……？

この作品に出てくる一部キャラクターは“ないと・めあ”のDBを引用させていただきました。

10/5 “ないと・めあ”の方でも掲載させていただけました！

## 各話エロ成分表

各話のエロ成分の詳細を乗せておきます。

全話エロありですが趣向にあつた話を見たい方はこちらを参考にしてください。

エロシーンのみ見たい方はこちらを参考にしてください。

……一番お勧めで作者の得意なエロシーン

……次にお勧めなエロシーン

一応ネタバレになるので注意してください

主に後半がおねシヨタ女性上位です。

1話 BF・正常位・体力衰退・外出し(腹射・パイ射)

2話 BF・正常位・騎乗位・女性上位・体力衰退・微逆レイプ・微ヤンデレ・中出し

3話 BF・おねシヨタ・少年退行・ハーレム(3P)・後背位・女性上位・微逆レイプ・中出し

4話 BF・おねシヨタ・ハーレム(3P)・騎乗位・顔面騎乗位・逆レイプ・拘束・ディープキス・媚薬・中出し・連続射精

最終話 おねシヨタ・ハーレム(5P)・騎乗位・逆レイプ・中出し・乳首攻め・アナル攻め・連続射精

## 用語説明

バトルファック

B F……… 交わりでのイかせあいの勝負。

淫魔ハンター……… B Fで淫魔をイかせることに特化した職業。素質のある者しかその職に就けず報酬も高い。その代わり負けると恐ろしい呪いがかかる。

## 1話（前書き）

ある工口漫画に触発されて描き始めた、工口の短編です。

## 1話

光の届かない木々に覆われた森の中。

柔らかい草の上に押し倒した女性を犯していた。

「あんっ……いいわっもっとなんっ……んはあ！」

褐色の肌に白く長い髪、そしてぴんととがった耳は彼女が人間では無いと言うことを示している。

年齢は見た目から推測すると、20歳中盤くらい。

しかし、それはあくまで人間だったらの話。

今俺に犯されているこの女性は、ダークエルフと呼ばれる森の住人だった。

普通、森にいるエルフは人間と関わりを持たない。

だが今彼女は俺と性交をしている。

しかもさつき出会ったばかりにもかかわらずだ。

そこには知的なエルフを思わせる姿はなく、ただ快感をむさぼる雌がいるだけだった。

まるで淫魔であるかのように……。

「やあんっ……もっとなんっ……精液を中に出してっ！」

俺はそのリクエストに応えてもっとなんっを突き入れる。

彼女は甘い嬌声を上げながら、背中にも手を回してきた。

重量感のある胸が腰を突き上げる度に揺れ動き、互いの汗が飛び散っている。

膣の中はうねうねと蠢き、ねっとりとなんっ全体を愛撫し刺激を与え

てくる。

でも俺はそれ以上に目の前の彼女に快感を与えていた。自分よりも早く彼女を絶頂させなければならぬ。なぜなら俺は淫魔ハンターだからだ。

「んあああつ……！」

ダークエルフがひとときは激しい声を上げると、膣肉で俺のモノを締め付けた。

「うくつ……！」

みっちりとした肉壁の甘美な感触に、思わず射精しそうになった。がぎりぎりのところで耐えきった。

彼女は身体を痙攣させた後、眠りに落ちるように気を失った。

「あぶなかった……！」

意識を失った彼女の膣内から自分のペニスを引き抜く。愛液にまみれたそれを抜くとぬちゃっとした音がした。

草の上に倒れ込んだダークエルフの顔を見ると、目をつむり穏やかな息を立てていた。

よかった。

彼女を淫魔にしないで済んだ。

俺は裸で横たわる彼女にそつと服をかぶせるとその場を後にし先に進んだ。

目的地は、この森の奥にあるエルフの城だった。



数日前、静寂の森と呼ばれるエルフと妖精達の住む森に異変が起こった。

それは、その名の通りこの静かな森とは縁が無いように思えるものだった。

彼女達が村の男を襲いだしたのだ。

それも性的な意味で。

優れた理性と知性を持つ彼女達からは、想像もつかないことだった。

異変は村の少年がエルフの女性に連れ去られた事から始まった。

学校の帰り道、少年が森の側を1人歩いているところエルフが出てきた。

そのエルフは少年に話しかけると、そのままどこかへ連れて行った。

村人は少し不思議に思ったが、特に何かをするという事はしなかった。

エルフは森の賢者とも呼ばれ、森の住人の中でも特に知性的だ。

先ほどエルフは人間と関わりを持たないと言ったが、極まれにこうして人間の村へ来ることもある。

だから村人は彼女に何か考えがあつてのことだろうと思つていたので。

しかしそれから数日経とうと少年は帰つてこなかった。

心配した少年の両親と村の男達が彼を探しに静寂の森に入った。

そこで見たのは男女の交わりをしているエルフとその少年の姿だった。

草むらの上で仰向けに横たわった少年の上で、エルフがはしたない声を上げ腰を振っていた。

あまりに衝撃的な出来事に少年の母親は悲鳴を上げた。

エルフと少年はそれに気が付いたが、交わりをやめようとはしなかった。

彼らはすでに深く肉欲に溺れていたのだ。

男達がやめさせようと彼らに近づくと、どこからか他のエルフや妖精達が集まってきた。

彼女達は男達を捕まえると同様に襲い始めた。

それは異常な状況……。

淫魔と呼ばれる悪魔が人間を襲っているのと同じだった。

この事件は、そこから何とか逃げてきた村人により明るみになった。

それ以降、彼女達は時々森の方からやってきては男をさらい森の中に消えている。

緊急を要する事態だった。

そしてこの村で唯一の淫魔ハンターである俺が、その事件の原因を探るべく調査に向かわされたというわけだった。

行き先は森の深部にある、高名なエルフ達が住む城。

この件に関して、原因についての手がかりが全く何もない。

だからまずはそこに向かい、彼らから話を聞くのが先決と思われるのだ。

そうしてそこに向かっていく途中、俺は襲われた。

まずはじめに襲ってきたのは、ドライアドという木の妖精。

彼女が宿る木の側を通り過ぎた時、根で身体を捕らえられ無理矢理に性交をさせられた。

身体を自由を奪われながらの不利な状況だったが何とか彼女を先に絶頂させることが出来た。

それからさっきのダークエルフ。

彼女の時も足にからんでくる草の罨にはまってしまった所を襲われた。

またしても不利な状況だが、ぎりぎりのところで彼女を先にイカせることに成功した。

幾度かそんな交わりを終え、自分の中には不安が生まれていた。

普通淫魔というのはイかせてしまえば、消滅していくはずだ。

だが彼女達は気を失うだけだった。

それは彼女達が淫魔になる手前の卵であると言うことを意味していた。

この状態では、幾らいかせても消滅しない。

意識を取り戻せばまた襲いかかってくる。

やっかいに思えるが、通常その状態の者達は淫魔としては非常に弱い。

だが、この森にいるエルフや妖精達はそうではなかった。

それは今まで俺自身がエルフ達と交わった事など無く、彼女達に對して耐性がないことが原因だったのかもしれない。

それもそのはずで、理性的な彼女達は淫魔から最も遠い存在なのだ。

エルフ達はそんな事はお構いなしに、美しい容姿と甘美な肉体をもって容赦なく責め立てて来ていた。

今までは1人相手だから何とかかなったものの、この先も襲われ続け集団で囲まれたりしたら耐えられるのかわからない。

淫魔の卵である彼女達の中に精液を出すことだけは、なんとかして避けなければいけない。

不安を胸に出来るだけ出会わないように歩みを進めていった。

しばらく進むとつつそうと木々が生い茂っていた場所から、空の見える開けた花畑へと出た。

近くには小川のせせらぎも聞こえる。

まずいな……。

ここを通らなければ、エルフの城へはかなり遠回りになってしま  
う。

しかし身を隠すものが何も無い。

丸見えになってしまふのだ。

それは襲われる可能性が格段に増すことを意味していた。

木の影に隠れ色々考えたが、結局そこを通ることにした。

遠回りをする道のりの長さから考えると、その道中で襲われてしま  
まう可能性の方が高いように思えたからだ。

覚悟を決め花畑の中へと入った。

出来るだけ自分の事が悟られないように、足音に注意を払いゆっ  
くりと進んでゆく。

そのおかげか、半分の所までは誰にも見つからずに来れたようだ。  
残りもこのまま順調に行ければいいのだが……。

歩みを再開した。

そうして進み続けるとだんだんと眠いような感覚が襲ってきた。

なぜだかはわからないが身体が重い。

歩き続ける事がしんどくなってきた。

「つつ……」

軽いめまいのようなものまでする。

しかたがないので危険ではあるが、少しここに座って休憩するこ  
とにした。

花を踏みつぶさないように腰を下ろすと、この花畑に漂う花のいい香りを強く感じる。

ぼうつとしながら辺りを見回すと、今回の異変がなければ平和そのものと思える光景が広がっていた。

柔らかく降り注ぐ太陽の光、水の流れるせせらぎの音、花のふわつとした香り。

なんだか思考までもがぼんやりしてくるようだった。

「こんにちは」

突然、女性の声が聞こえてきた。

いつきに気が引き締まり緊張が覆う。

しかし周りを見渡しても誰もいない。

ただ一面に広がる花畑があるだけだった。

幻聴でも訊いたのだろうか？

「わたしはここです」

するとそれを否定するように、再び今度ははっきりと声が聞こえてきた。

音の出所を探してそこをよく見る。

そこには一輪の白い花があった。

少し大きめのその花は、太陽のように四方に広がる美しい花弁を持っていた。

この花から聞こえてきた気がする。

じっと見ていると、その予想は正しかったようで花弁の中に1人の女性の姿が見えた。

とても小さく、人差し指の大きさほどしかない女性だ。

手のひらの上に数人は乗せれてしまっただろう。

そのあまりのサイズの違いは俺に安心を与えた。性交を求められることがないと思ったからだ。

「や、やあ……こんにちは」

挨拶を返すと彼女はにこっと微笑んだ。

カワイイ……。

小動物に対する保護欲のようなものを感じた。

「君はピクシーかい？」

俺は彼女の事をピクシーと呼ばれる、いたずらな妖精なのと思っただ。

ここに来る前に森に住まう妖精達については事前に調べていた。

その中で身体の小さな妖精というのはピクシーの事しか記していなかった。

「いいえ、私はピクシーさんではないです。エルフィンと呼ばれる花の妖精なんです」

でも彼女は、それを否定すると自分はエルフィンだと言った。

「へえー、そうなんだ」

彼女のなんとも、ぼわーとした話し方に自分もゆったりとした気持ちになった。

気の抜けた返事をしながら、ここに来る前に調べていた情報のことをまた思い返す。

確かにエルフィンというのは彼女の言う通り花の妖精だ。

でも記憶に間違いが無ければ、エルフの仲間で大きさも人間位だったはずだ。

俺はそれを訊いてみた。

すると彼女は、

「よくご存じですね。そうです、私は今はこんな大きさですがエルフさんくらいに大きくなることも出来るんですよ」

と答えた。

やっぱり記憶は正しかったようだ。

しかし、ということは。

「この中であなたみたいなお綺麗な男性が通りかかるのを待っていたんです」

彼女が笑みを浮かべると、その小さな身体がみるみる大きくなっていった。

その変化に言葉を失う。

またたくまに彼女はエルフ達と変わらない大きさになった。

もう自分の目の前には豊満な胸に瑞々しい白い肌、肉付きのいいお尻を持った十分すぎるほどに性交が可能な可憐な女性がいた。

彼女の柔らかな匂いに誘われてか、情欲がかき立てられた。

エルフィンはだらーと力を抜いて座っている俺に跨がってきた。

ずっしりとした体重とやらかなお尻の感触が伝わる。

それから首に手を回してこう囁いた。

「私とエッチなことをしましょう？ いっぱい気持ち良くしてさし

あげますから……」

彼女は体重をかけ俺を花のベッドへと押し倒そうとしてきた。  
そこで我に返った。

彼女もきつとこのよくわからない異変に巻き込まれて男を求めて  
いるのだろう。

このままされるがままに押し倒されるのはまずい。

俺は力の入らない身体で、懸命に彼女のことを押し返した。

「えっ、そんな。これだけ花の匂いをかいでこんな力が出せるなん  
て」

エルフィンが俺が押し返してくると思っていなかったようで、す  
ぐに花の上に倒れた。

俺はそのまま彼女の両側に手を付き覆い被さる。

エルフィンの顔を見つめると、彼女は顔を赤らめた。

「でもこっちの体勢もいいですね……。さあ早く……」

エルフィンは下から手を伸ばし誘惑しはじめた。

こうなってしまうたら、彼女をイかせて何とかするしかない。

自分の下着を脱いでペニスを露わにした。

彼女はすでに勃起しているそれを見て、

「ああ、ずっとそれを待っていたのです。私の準備はもう整って  
いますのでそれを……」

うつとりと眩き、俺の腰に足を回してきた。

肉付きのいいふとももが絡められると、もう腰を引くことは出来  
なかった。



ペニスの先には、シースルーの薄いドレスを着ているだけで隠せていなかったエルフィン秘部のあった。

毛のないそこには愛液が滴り、物欲しそうに時折ひくひく震えている。

遮るものは何もない。

腰を進めればすんなり彼女の中に入る事となる。

気を引き締めペニスを突き入れた。

「ふあっ………これです、これが欲しかったのです………んっ、早く突いて下さい」

挿入を感じ取り彼女は嬌声をあげ快感を欲し始めた。

「うう………すごい」

しかし俺はと言うと、その膣内の感触に翻弄されまともに動くことが出来なかった。

肉壁がペニスにまとわりついたまま、びくびくと蠢いている。

それは精液を求めて甘噛みするような動きだ。

まだ腰を振ってもいないのに、早速精液が洩れ出そうだった。

でも中に出す事、それは絶対に避けなければならない。

ここに来るまで何人がこうやって精液を求めてくる者達に出会った。

彼女達は皆、淫魔の卵だった。

その状態で体内に精液を注がれば、本当の淫魔として覚醒してしまう。

そうなればもう一生淫魔のままになり、注がれた人間の精液に依存し、それなしでは生きられなくなってしまふのだ。

とにかく彼女達の一生を大きく変えてしまふことは避けなければ

いけない。

逆に絶頂に導いてあげれば、しばらくの間は眠ったように気を失う。

精液を出さずに絶頂させ、その間になんとしてもこの異変の原因を突き止め解決するのが自分の役目なのだ。

そんな俺の思いをエルフィンを知るよしもなく、“欲しい、欲しい”と一心に精液をせがんでいた。

口で説得するのは無理だろう。

ドライアドとダークエルフ相手に試したが、肉欲に染まりきっていていっさい聞き入れてくれなかったのだ。

エルフィンの素直な欲求は、ペニスの愛撫に直に現れていた。

「くうっ……！」

甘美な締め付けが、ペニス全体にあますことなく振りかかる。それを受けたペニスは快感を逃がすように震える。このままでは一方的に、快感を与えられるだけだ。どんどん不利になる。

だが腰を振ればきつとより強く感じさせられる事になる。

でも彼女をイカせるには、そうする他ない。

俺は根元まで咥え込まれたペニスを引き抜くように腰を引いた。膣肉が逃がすまいとするように絡みつく。

突き入れると迎入れるように奥まで案内され、先を吸われる。

「あぁんっ……そうです、もっと……もっとしてください……」

たった1往復で彼女の名器を存分に思い知らされた。

俺はダークエルフと交わったあとに射精をしておかなかったことを後悔した。

射精をすれば持続力が上がる分、体力が下がる。

でも俺は体力を温存するために射精はしないという選択を取った。しかし目の前のエルフィンをいかせるには、耐久力がなければまったく持ちそうにない。

しかもそれに加えなぜか温存させておいた体力までも低下している。

俺は腰を振りながらも耐えきれず、彼女の上に倒れ込んだ。

しっとりした肌が触れ、もちもちの胸がつぶれ柔肉の感触が伝わってくる。

エルフィンは、ふふふと笑うと俺の背中を抱きしめた。

「どうですか私と花の匂いに包まれながらの交わりは？ 力も抜けて最高に心地よいでしょう？ そうやってもっと甘えて下さい……後は私が最後まで導いて差し上げますから」

「……………！」

そう言われて理解した。

今俺の身体を包んでいる脱力感、エルフィンと花の匂いによるものだったのだ。

確かに自分の体力が急激に低下し始めたのはここに入ってからだし、エルフィンと交わり始めてからはそれがさらに加速している。

そうとわかればこれ以上長く交わり続けるのは危険すぎる。残っている力を振り絞って、腰を激しく出し入れさせた。

「……………あつ……………ふあつ、んっ、まだこんなに元気が残って……………あん

っ……いいですっ！」

エルフィンはそのことによって確実に快楽を感じていた。  
俺はさらに彼女の胸を愛撫する。

手の形に合わせて形を変えるその柔肉に心を奪われそうになるが、  
必死に耐え彼女を絶頂へと導いていく。

その愛撫によってエルフィンは乱れていった。

しかし自分の限界も近かった。

きゅっ と敏感な部分を締め付けるように蠢いたかと思うと、柔ら  
かくまとわり甘えさせるような感触を与える膣、愛液による水音と  
エルフィンの嬌声、彼女と花の香り。

こんなものを味あわされては、射精を我慢している自分にとって  
はたまったものではない。

俺は自分に振りかかる快感をすべて受け止めながら、半ば賭ける  
ようにして彼女を一心に突き上げていた。

そしてそのときはやってきた。

もう我慢が出来なかった。

尿道の先までせり上がってきた精液が出口を求めて今か今かと外  
へ向かおうとしている。

とっさに腰を引いた。

だが、みっちり締め上げられたふとももによって抜くことは叶わ  
なかった。

ならばと、腰を思い切りエルフィンに押しつけた。

「やあっ、あっ……ふあぁんっ！」

それが最後の引き金となり彼女はついに絶頂を迎えた。  
同時に俺を拘束していたふとももの力が緩んだ。  
その隙に、瞬時にペニスを引き抜く。  
とたん射精がはじまった。

「くううあつ……！」

びゅるびゅるびゅるるるる　！

我慢に我慢を重ねた精液が、もの凄い量と勢いと共に放出される。  
線を描くように鈴口の外から出て行く。

腰が快感にがくがくと震えた。

精液がエルフィンに向かって降り注がれると、彼女のお腹と胸を  
白く染めあげる。

そうして欲望の証をすべて出し切ると、ようやく快樂の波が去っ  
た。

「はあ……はあ……」

射精したばかりで呼吸はまだ落ち着かないが、気持ちはいぶ落  
ち着いた。

改めて自分の出したものを見る。

お腹を中心降りかかったそれは、エルフィンの美しい身体を汚し  
ていた。

自分の出した量の多さに驚いた。

彼女のおへそには精液の溜まりが出来ている。

エルフィンは既に絶頂で気を失っていた。

ほんとに危なかった……。

今回は寸前のところで中に精液を出さずに済んだが、もはやそれは自分の実力ではなくただの運なのだろう。

少しの差で、もし間に合わなければ彼女を淫魔にしまっていった。

その事實は、改めて早く異変を解決しなければいけないという考えを持たせた。

エルフィン of 大事な部分を隠す様に自分の上着をかけ、足早にエルフの城に向かった。

## 2話

結論から言うと、異変は想像よりも深刻なものだった。

エルフが住まうはずの城の場内も、異変によって色欲にそまった者達で満たされていた。

城門でも、食堂でも、はたまた玉座の間でも彼らはところかまわずといった様子で交わりをしていた。

現在俺はというと、城内のバルコニーに隠れ彼らをやり過ごしていた。

よくない状況だった。

先程、何人かのエルフに見つかってしまったのだ。

この城の中には村の男達や男のエルフもいたものの、絶対的に女性のほうが数が多かった。

男一人につき、何人ものエルフ達が群がれるだけ群がり性交を行っていた。

それでもあふれてしまうものがいた。

そんなあふれでたエルフ達に見つかってしまったのだ。

彼女達は俺を見つけると肉欲の色を浮かべこちらに向かってきた。彼女達の性的な魅力は、ここに来るまでの何度か行った交わりで

よくわかつている。

そういった者達を何人も相手にしたらあつという間に果てて、自分も彼らたちのように肉欲をむさぼってしまうことになるのは明白だった。

だから一目散に逃げ出し、今はこうしてバルコニーに隠れているというわけなのだ。

そつと窓から城内の様子を覗いてみる。

まだ中には、さっきまでそこにいたはずの男を捜しているエルフが複数人いた。

このままでは見つかってしまうのも時間の問題だろう。

なにせこの城は、彼女達の城なのだ。

隠れられそうな場所を探していけば、いずれこのバルコニーにたどりつく。

手すりから下を見降ろした。

……飛び降りるのは無理だろう。

ここは大体4階くらいの高さだろうか。

いくら下が芝生といえど、死んでしまう可能性がある。

でも中にも戻れない。

限られた時間の中自分にできることを考えると、外の壁伝いに他の部屋に逃げるのが最善に思えた。

下の階に降りるのは難しい作りになっていたが、その分同階の他の部屋に移動するのは何とかなりそうだった。

一人が通れそうなほどの足場がある。

手すりを跨ぐと、そこを伝って移動を開始した。

壁の凸になっている部分をつかみながら慎重に移動する。

途中足場から小石が下に落ちると、落下の長さからここが如何に高いのかを思い知らされる。

これまでとは違った意味で危険だった。

何でこんなことをしているんだろうか……？

そう思って自分の任務を思い出す。

そうだ、俺は城の中にまで侵食しているこの異変を解決しなければならなかった。



とにかくまだ理性を持った人物がいるかもしれない。  
自分出来ることはそういう人を探し、話を聞くことだ。  
改めて気持ちを入れなおした。

足場を伝い建物の角を曲がると、一つの部屋にたどり着いた。  
俺はそのバルコニーに入りほっと一息つく。  
手汗がびっしょりで握力もなくなっていたので危なかった。  
しばらく休憩し呼吸を落ち着けてからその部屋の中を覗いた。

カーテンの隙間から見えたそこには、白いヴェールが装飾された  
大きなベッドがあった。

それ以外には小さな机やクローゼットが置いてある。

その部屋の大きさと、豪華な家具から考えるにおそらく身分の高  
い人物の寝室なのだろう。

よく見るとベッドの上には誰かが寝ていた。

レース越しでよくは見えないが、交わりを行っているわけではな  
さそうだ。

長い髪が見えたのでたぶん女性で、その部屋には彼女1人しかい  
ない。

まだ理性を残している人物かもしれないという期待が生まれた。

窓をコンコンと軽くたたいた。

……。

しばらく待ったが返事がない。

もう一度、今度は少し強めにたたいてみた。

が、同じことだった。

なんとなしに窓に手をかけると、それは抵抗なく開いた。

鍵がかかっていなかったのだ。

不用心だなと思いつつそこから中に入れて貰うことにした。

部屋に入ると女性の物と思わしき声が聞こえてきた。

それは、話し声でも、寝息でもなくどこか熱の入った色のあるもの。

俺はまだ気付かれていなかったようなので、クローゼットの影から静かに様子を覗うことにした。

つややかで柔らかい質感を思わせる長い金色の髪、白く汚れの無い肌、バランスのとれた凛とし整った顔、王女様という言葉がぴつたりの奥ゆかしい美女がベッドの上にいた。

彼女は眠っているわけではなく、豊満な母性を感じさせる胸を露わにしあろう事が自慰に耽<sup>ふけ</sup>っていた。

気品のある衣服をだけさせ、手に余るほどの胸を揉みしだきながら秘部を弄っていた。

指の先が彼女の中に挿れられると、くちゅつと水音がしかすかな嬌声も洩れていた。

さっき聞いたものは、自慰に耽る彼女の声だったと理解した。

俺は、その品位の高そうな美しい女性の自慰に見入ってしまった。淫魔とは無縁の存在に思える彼女の姿に、俺の淫魔ハンターとしての経験は役に立たなかった。

ただぼうつと自分の物を大きくさせながら、彼女を犯したいという想いが浮かんだ。

そこで理性を取り戻した。

こんな異常な状況に陥った城内で、交わりこそ行っていないものの彼女も情欲に染まっている。

ならば彼女もこの異変に巻き込まれたに違いない。

そうなれば男である俺がここに居るのは非常に不味い状況だ。

早くこの部屋から立ち去ろうと考え、静かに窓際に戻り窓を開け

ようとした。

しかし入ったときには鍵がかかっていなかった窓が、なぜか開かなくなっていて力を入れた拍子にいやな物音を立てた。

室内に響くその音は彼女に俺の存在を教えてしまった。

「だ、誰ですか!？」

振り向くと、ベッドの上から俺を見つめている彼女の姿があった。

「す、すみません! すぐに出て行きますので!」

俺は慌ててそう言い、入り口のドアの方へと進んだ。

そしてドアノブに手をかけたところで、

「待つて下さい、アレク君!」

彼女は俺の名前を呼んだ。

初対面であり、知っているはずのない自分の名前を呼ばれたことに驚き足が止まる。

再びベッドを見ると彼女が潤んだ目で見つめていた。

その姿に、ドキッと心臓が音を立てる。

「お願いです……行かないでください。ここにきて私の話を聞いてください……」

彼女は消え入りそうな声で言った。

その庇護欲を掻き立てるような彼女の姿に迷いが生じる。

でもさっきまで彼女は自慰に耽っていた。

きつと異変による肉欲に染まっているはずだ。

彼女のことを考えるなら足早に去ったほうがいい気がする。

だが、こうしてまともに話しかけてきた事も確かだ。  
彼女の他に話が出来そうな人物はいなかった。

迷ったあげく俺は彼女の横に行き静かに腰を掛けた。

近くに行くと彼女のやわらかい花のような香り、男を誘うような雌の匂いを感じられた。

「ごめんなさい……こんな格好で……」

彼女はベッドにあったシーツを羽織るとはだけた肌を隠した。

「自分のほうこそ、す、すみません！　こんな覗き見るようなことをしてしまって……」

そう言うと彼女は顔を赤らめながらも優しい笑みを浮かべた。

「いいんです……こんな昏間からそんなことしているだなんて誰も  
思わないですものね……私は、この城の王女でエルミアと言います  
……」

やはり王女様だったのか。

エルミアから伝わる高貴な雰囲気も、この立派な部屋にいたことも  
も納得出来た。

そして俺も自分の自己紹介をしようとして、はっと気が付いた。  
彼女は俺の名前を知っていて、さっきそれで呼んできた。  
なぜなのか訊こうとすると、彼女はそれ遮るように話を続けた。

「聞いてください……。今この城を中心に淫魔の香気が発せられて

います」

「淫魔の香気……?」

聞き慣れない言葉だった。

「そうです……。昔から伝わる秘術を使った香りで、女性がその匂いを吸うと情欲に染まり男を求め淫魔になってしまいます……。このままでは、もっと範囲を広げ森に住まうエルフや妖精達が皆淫魔になってしまいます。それを止めるのを手伝って欲しいのです」

彼女は時折苦しそうにしながら、今起こっていることを必死に伝えてきた。

「ど、どうすればいいんですか?」

「その香気は1人の人物から発せられています。その人を満たしてあげれば良いのです……」

「満たす……ですか」

おそらく満たすというのは性的絶頂に導いてあげることだろう。なら淫魔ハンターである俺が発信源になっている人物を探し頑張ればいいのだ。

そうわかると一刻でも早くここに居る彼女を……皆を救ってあげなければという想いが生まれた。

「わかりました! じゃあその人を探せば」

「ううう……!」

と、急にエルミアが苦しそうにベッドに倒れた。うずくまって細い声を上げながら震えている。

「だ、大丈夫ですか!？」

とっさに彼女に駆け寄り肩を持った。

すると急に彼女は俺の手首を掴み、ぐいっと自分の方に引き寄せた。

その勢いで俺はベッドに倒れ込み、上を見るとすぐそこに彼女の紅潮した顔があった。

熱を持った吐息が顔をくすぐるようにつけられる。

「お願いがあります……私を、犯してくれませんか？」

そして艶のある声でそう囁いてきた。

エルフの王女である絶世の美女に囁かれる最高のシチュエーション。

一瞬、我を失いそうになった。

「っ！ ダメです！ あなたは、エルフの王女様なんでしょう？ こんなところで俺なんかと交わっていいはずがありません」

エルミアはエルフの王女だ。

身分の高いエルフの、王族の女性なのだ。

今ここで彼女を一時的な欲望から救うためにしる情事に走るのは絶対に良くない。

「でも無理なんです、自分を押さえることが出来そうもないんです

……」

だが彼女は、あきらめる様子を見せず捨てられてしまつ子犬のよ  
うな目で見つめてきた。

「しかし……」

「押さえきれなくなって、男の人を襲つてしまつたら……私は……」  
「……」

確かに彼女と交わるのは良くないが、精を受けて淫魔になつてし  
まうことはもっと良くないのかもしれない。

「お願いです……」

そう言つとエルミアは、シーツを取り去り俺の目の前で胸も秘部  
も晒した。

「っ！」

高貴な女性のあられもない姿に呼吸が止まりそうになる。

彼女は仰向けになると股を開き、手をさしのべて誘いはじめた。  
毛の生えていない秘部に視線を移すと、ぬめっているのがよくわ  
かる。

彼女が男を受け入れる準備は既に出来ていた。

その姿は判断を鈍らせた。

「……わかりました。でも挿入は出来ません……。あなたを汚した  
くないんです」

しかし、やはり王女様と行為に走るといふ勇氣は自分にはなかつた。  
それに彼女の汚れ無き、美しい肌と美貌は触れていいのかもためらうほどだった。

「いやっ……そんな事言わないで下さい。あなたのが欲しいんです……。それに指じゃきつと無理です。私もさつきから自分で慰めているんですがダメなんです……」

「でも……」

「いいんです……あなたなら……私達を助けにここまで来てくれたのでしょうか？　お願いです……私のことも助けて下さい」

「……………」

目を潤ませ懇願してくるエルミアの願いを断り切れなかった。それに彼女を犯したいという欲望も、無いと言えば嘘になる。俺は自分のズボンを脱ぎ、彼女の痴態をみて勃起したモノを出した。

「ああ………そうです。それを私に挿れてください……」

彼女がうつとりとした声を出した。

俺は仰向けになっている彼女に近づき、達膝の状態でひくひくとも欲しそうに蠢く彼女の秘部にそれをあてがった。

にちゅつと、愛液と亀頭が触れた水音がした。

その先からは、彼女の熱い体温が伝わる。

「ごめんなさい………じゃあ挿れますね」



そう言って、俺はエルミアの中に自分のペニスをゆっくり挿入していった。

「んああ……あつ、あ……アレク君が、私の中に広がって……んっ……」

途中で何かに引っかかった感触がしたが、膣内も十分にぬめっていたためそのまま奥へと入り込んでしまった。

「くうっ……！」

とたん甘美な感触が広がり声が洩れた。

肉の壁が四方からきゅつきゅつときゅつと締め上げながら、精液を出させようとじんわり蠢いている。

ペニスに与えられるその感触は、直な快感となって俺に襲いかかる。

思わず腰が引けた。

「はやくっ……めちゃくちやになるくらい犯して下さいー！」

エルミアは俺の腕を掴みながらせがんできた。

そうだっ！

早く彼女のことを絶頂させなければ。

もともとそうのつもりで、この行為をしているのだ。

彼女を感じさせるために腰を動かし始めた。

「あつ、あ……んあっ……そ、そうです……もっとそうやって、私の中にいっぱいアレク君を感じさせて下さい……」

彼女はしがみつinaながら、俺の名前を呼んでいた。  
とにかく一心に腰を上下させる。  
しかし、

「あくっ……エルミアさんの中、良すぎて……！」

ぴったりとフィットするようにペニスに吸い付いてくる膣肉と、  
とろとろの愛液によって、俺は始まって間もないのに危ない状態に  
なっていた。

自分の体重を支えていられなくて、彼女のたわわな胸をクツシヨ  
ンにするように頭を置いた。

その身体を預けた状態で必死にペニスを出し入れする。

「うふふ……嬉しいです、もっとたくさん気持ち良くなって下さい」

エルミアはそんな俺の頭を包むように手を置いていた。

おかしい……。

エルフィンと交わったときもそうだったが、森に入った直後より  
も確実に身体に力が入りづらくなっている。

最初は連戦による疲れが原因かと思っていたが、どうやらそうで  
はないようだ。

今の状態では自分に主導を置いて絶頂させると言うことが難しい。  
それに……

びくっびくっ

「うぁ……！」

「あつ……おちんちんが私の中で震えて……」

快感に対する耐性もなくなっている。

エルミアの膣が良すぎるのもそうだが、加えて何か俺の身体に起こっていることが受ける快楽を増加させている。

我慢が出来ずにエルミアの中に先走りを出してしまっていた。

悪い状況だ。

このままでは淫魔にしないようにと彼女を抱いたのに、俺の方が先に絶頂に導かれ彼女を淫魔にしてしまう。

そんな事になれば本末転倒だ。

俺は彼女の中から自分のモノを引き抜くため腰を引いた。

ぎゅっ！

「なっ……!!」

しかしそれはエルミアが足をからませたことによって阻止された。むっちりと肉が付いたふとももが、俺の腰を挟み込んで抜くことを許さない。

「ダメですよ……私の中からおちんちん抜いちゃあ……」

エルミアはにやりと妖しい笑みを作りながら俺の顔を見てきた。その表情は精を貪欲に求める淫魔のそれだった。

まさか彼女はすでに完全に香気に侵されていたのか？

「エ、エルミアさん……このままだと精液が出ちゃいそうなんです、抜かないと……あなたが危ないんです!」

俺は必死になって彼女に訴えた。

「射精しちゃいそうなんですか？ いいですよ……そのままアレク君の精液を私の中に注いで下さい」

だが彼女は淫靡になるということにも聞く耳をもたず、精液をねだってきた。

そしてエルミアは足を締め込むことで俺を自分の方へ引き寄せた。

「……遠慮はいりません。いつでも受け入れる準備は出来てますから……」

エルミアは再び倒れこんだ俺の頭を撫で、耳元で囁いた。

甘い誘惑に、我慢の鎖が解かれそうになる。  
残っている理性がそれと必死に戦っていた。

「エルミアさん……やめて下さい！ ……早く抜かないと」

そうして抵抗を続けていると、

「……そんなに私の中に出したくないんですか？」

彼女は機嫌を悪くしたような低い声で言った。

と、その瞬間世界が反転した。

何が起こったかわからない。

しかしすぐに自分の目の光景と、身体に伝わる感触に状況を理解させられた。

腰の上を感じるエルミアの体重と柔らかい肉の感触。

上を見れば、高い位置から俺を見下ろしてくる彼女の顔。

俺は一瞬にして彼女に組み伏せられ、騎乗位の状態に持ち込まれていたのだった。

「アレク君はひどい子ですね……こんなに精液を欲しがっている私にお預けするなんて」

そう言つと繋がったままの状態で彼女は腰をぐりぐりと押しつけてくる。

それにより中で肉壁に揉まれ擦られるペニスにはたまらない快感が押し寄せる。

確実に自分に不利な状況に陥つた。

抵抗しようにも仰向けに寝かされ、エルミアがふとももを腰に密着させてくるのでまともに動くことすら叶わない。

「うくつ……ち、違うんです！ 精液が出たら、エルミアさんが淫魔になってしまうんです！ それだけは避けないと」

「いいんです私はアレク君の淫魔になりたいんですから……」

「な、何を言ってるんですか！ 正気に戻ってください！」

「アレク君こそ何を言ってるんですか？ 私は最初から正気ですよ？」

俺はエルミアが香気に犯されそのような行動に走つたと思った。しかし彼女はそれを否定した。

「どつという意味ですか……？」

「どういう意味も、そのままの意味ですよ……どうして私がアレク君に抱かれたがっていたかと思っっているんですか？」

「それは……欲求を、一時的抑えるためじゃ……？」

「全然違いますよ。私は最初からアレク君の淫魔にして欲しくて抱いてもらったのですから」

エルミアは当然のように言い放った。

「そんな……」

「だから精液を中に出してもらわないとダメなんです」

彼女はそれを求めるように腰をくねらせた。

肉の中で包まれたペニスにまた甘美な感触が伝わる。

この状態のままでは、なすがままに彼女の求めるとおり精液をさげってしまうことになる。

「うあっ……ど、どうしてですか？」

組み敷かれ主導を奪われた状態では、自分にできることは限られている。

俺は彼女との対話によってどうにかする糸口を見つけようとした。するとエルミアは影を落としたような表情をしながら質問を投げかけてきた。

「アレク君………なんで私があなたの名前を知っていたのだと思っっていますか？」

「……」

彼女のその質問。

俺も疑問に思っていた。

なんでエルフの王女が村のしがない男を知っているのか。

淫魔ハンターとしても新米な俺は、自分の名前が知れ渡っているとも思えなかった。

なら以前に会ったことがあるという考えに至るのが自然だ。

その考えは自分の記憶の片隅に、幼いころに静寂の森で見た1人の美しい女性のことを思い出させた。

「 ! エルミアさん………俺はもしかして昔あなたと」

「そうです……私達は何年も前ですが一度出会ったことがあるんですよ」

そう言われ蘇る昔の記憶。

それは俺が外で駆け回るのが好きな少年の頃だ。

昆虫を追いかける内に静寂の森に迷い込んだ。

帰る道もわからず泣きわめいた時に森の奥から現れた美しい女性。

彼女は俺のことをなくさめると家まで送ると言ってくれた。

俺はそれが嬉しくて、村に帰るまでの道で彼女と沢山の言葉を交わした。

彼女の表情は、とても楽しそうだった。

「私はあの時のあどけない少年のあなたに、あるうことが恋心を抱いてしまったのです………だからこうして………ずうっとこの城で、

アレク君と結ばれることを夢見ていたんです」

「エルミアさん……」

「でもエルフの……それも格式高い王族の私が、アレク君と結ばれることはありません。それはあつてはならないことなのです。だから私は淫魔になる道を選びました。それほどまでにあなたのことが欲しいのです」

そして彼女は「だから、はやくあなたの精液を下さい」と囁いた。妖しい誘いに耳から身体全体に鳥肌が立った。

「で、でも、淫魔になんてならなくてもいいじゃないですか？ そんなものになつてしまつたらあなたは一生、精液なしでは生きていけなくなつてしまふんですよ？」

「……確かに淫魔にならずにあなたと結ばれたならどれほど良かったですでしょうか。でも誰がそれを許してくれるのですか？ あなたは私を受け入れてくれたのですか？ そんな問題が沢山あるのに、本当に淫魔にならずして結ばれることが出来たと思えますか？」

エルミアは俺に考えさせるように問い掛ける。

答えがわからない質問に言い返すことは出来なかった。

「あなたの精を受けながら生きる……それは私にとって素晴らしいことなんです」

彼女はうつとりと言つた後、

「……それにもう手遅れなんですよ？」



意味ありげな事を言葉にし、にやりと口角をつり上げた。

「淫魔の香気は私から発せられているのですから……」

その言葉を発するエルミアの姿が、理性のかけらも感じられないただの淫魔に見えた。

「そ、そんなっ……！」

俺の頭は混乱していた。

まさか俺への想いが、彼女を狂わせエルフと妖精達を巻き込んだ異変の原因になっていたとは。

さっき彼女が言っていた、発信の源となる人を満足させてあげると言うこと。

それは性的な絶頂に導けばいいことだけだと思っていたが、彼女は淫魔にならなければ満たされないのではないかと思える。

しかし彼女を淫魔にするというのは、自分自身の手によってということになる。

そんな事はしたくない。

彼女の一生を狂わせてしまう。

だが、異変を解かなければ淫魔の香気は広がり肉欲に染まるエルフ達が増えることになる。

どうすればいいかなんて、わかるはずがなかった。

動揺している俺を余所に、彼女は腰をゆっくりと上下に動かし始めた。

「んあっ……私はずつつとずつつとこうして身体を重ね合い、繋がる日のことを待っていました。日が昇り月が昇り、沈んではまた昇る。その繰り返しの日々を……どれだけアレク君のことを考え待ちわびていたかわかりますか？」

エルミアは俺の胸に手を付くと、そこを軸に肉壺の中にペニスを出し入れさせる。

「はうあ……エ、エルミアさん……！」

今までじわじわと真綿で絞められるように快感を与えられていたペニスが、彼女の膣のひだに擦られて悲鳴を上げる。

「どうやったらあなたと結ばれるのかあらゆる事を考え……それで結ばれることが出来ないとわかった時は、この満たされることのない生涯を終えようかとも思いました」

すっかりペニスの形を覚え馴染んだ膣が擦られると、蕩けていくような感触が広がる。

「そんな中アレク君が淫魔ハンターになったと聞きました。それは今まで知らなかった淫魔というものを知るきっかけになり、この香気を発する秘術を学ぶ事にもなりました。だから淫魔さんにはとても感謝しているんですよ？」

「ううう……」

ペニスと膣肉の境界線が感じられず、それはまるで本当に溶け合っているのだと錯覚させる。

「でも感謝している反面、もの凄い嫉妬と怒りもあります……」

彼女が腰を振る速度を速めると、結合部からあふれ出た愛液がぬちゃぬちゃと卑猥な水音をたてる。

「アレク君は淫魔ハンターとなつてからいつたいどれだけの女の子を抱いてきたのですか？」

そのあふれ出た愛液は、俺のペニスを伝い睾丸を流れ尻の方にまで達する。

「こんなあなたを想っている私の事を忘れ、放っておいて、いつたいどれだけ雌の肉穴にこのおちんちんを挿れてきたのですか？」

エルミアが腰を動かす度に豊かな胸がたふたふと柔らかさを目に焼き付けるように揺れ動く。

「誰のおまんこが一番気持ち良かったのですか？」

今度は一旦腰を振るのをやめると、中のねっとり絡みつく膣肉をあわせるようにお尻を押しつけ根元まで包み込まれた。

そして、逃がさないとしても言うようにぎゅっと中を締め上げた。とたん耐えきれない快楽に欲望の先汁が彼女の中に飛び出る。

「うあっ……！」

「うふふもちろん、私ですよ？　そう言わないと許しませんから」

エルミアは快感に震えるペニスを感じ取り、得意そうに笑みを浮かべた。

それは愉悦の表情。

自分が彼女という肉食獣に捕らえられた、1匹の山羊のように感じられた。

これでは、本当に射精まで幾分の猶予もない。

俺は何とかこの状況だけでも脱するように彼女をイかせようと、組み敷かれた体勢のまま彼女の腰を掴み下から突き上げてみた。

「ああっ……アレク君……やっと私を求めてくれるのですね？ん  
あっ……いいですもつと突いて、あなたを感じさせてください！」

エルミアは嬌声を上げ快感を享受しはじめた。

「はあっ……はあっ……！」

苦しいほどの快感が降りかかる。

でも、このまま突けば何とかなるかもしれないと考え必死に腰を振る。

「アレク君……アレク君……アレク君っ！」

エルミアは俺の名前を呼び、ひたすらに快感を求めている。

一心に突き上げた。

彼女を淫靡にしないためと思って必死になった。

だがかなりの快感を感じているはずなのに、いくら突こうが彼女はいまだ絶頂していなかった。

自分の限界はすぐそこに迫っていた。

「うう……もっ……」

これ以上彼女の膻を味わえば絶頂してしまう。  
そう感じ取ったところで腰を引いた。

体力も限界に近く身体中には汗がにじみ、これ以上動ける気もしなかった。

ベッドと彼女の身体に挟まれた俺には逃げる場所はなかった。

「んあっ……もう、お終いなんですか？」

エルミアが訊いてきた。

彼女は感じながらも、まだまだ余裕があると言った表情だった。  
それは絶望という感覚を教える。

「どうでしたか？ ……淫魔の香気に犯されながらの交わりは？  
身体の力も上手く出せなかったんじゃないですか？」

彼女はうふふと笑いながら尋ねてきた。

「そんな……！」

「香気は男にも効果があるのか？」

「淫魔の香気は女の人ばかりではなく、男の人にも効果があるんですよ？ 匂いは感じられないと思いますが吸い込めばじわじわと体力を奪ってゆき、快感を受けやすくなるんです。アレク君はそんな中でよく頑張りましたね」

彼女は俺をなだめるように髪を撫ではじめた。

「それに私は秘術によって絶対に絶頂しないんですよ……。想い人の精液を体内に受け入れるまでは……」

それじゃあ、自分の体力と精力を削って必死になっていたのも無駄だったのか……。

「そうです、最初からアレク君は私と繋がった瞬間から精液を注ぐことが決まっていたんです」

望みなど最初から無かったのか……。

「そんな表情をしないで下さい。膣内で射精する事によって今から私とあなたは結ばれるんですから……」

エルミアは限界寸前まで高められたペニスを啜え込んだままゆっくりと腰を動かし始めた。

「……くうっ！」

裏筋を、舐めあげる様な感触がじつとりと伝わる。

彼女は俺の限界を悟っているようだが、すぐには出させないようによつくりと行っていた。

「今からアレク君の精液をいっぱい出させてあげます。こつやっつてじわじわやっつた方がきつと沢山出ますから……我慢できなくなつたらいつでも好きなときに……」

何もかもを受け入れてくれる聖母のような表情を浮かべたエルミアが俺を見つめていた。

彼女は俺の手を掴むと自分のおっぱいに持って行った。

とたん、汗のにじんだ手に吸い付いてくる柔らかい胸の感触が伝わる。

「このやわらかいおっぱいも、あなたを包んでいるおまんこも何もかもあなたのものに出来るんですよ？ さあ迷いなんて捨てて私を受け入れて下さい……」

手から伝わる柔肉、ペニスに伝わる膣肉、腰から伝わる尻肉。

身体のだこもかしくも彼女に包まれ夢見心地のまま、その優しい表情の裏に潜んだ彼女の狂気も忘れていた。

「エ、エルミアさん……も、もうダメです……い、イクううっ  
！！」

びゅるびゅるびゅるるる      ！！

彼女の体内に我慢に我慢をかさねた快感の証が迸った。  
それは尿道を伝い膣に出て行く度に裏筋を振るわせる。  
エルミアの膣肉はそれを歓迎し中へ中へと取り込んでいく。  
その精液は、彼女を淫靡にするための精液。

「あっ、あっ、あくううう      ！！」

「あ、あっ、あんっ……あっいです……こ、れがアレク君の……あ  
っ、はあんっ！」

放出が止まらない。

それは今確実に彼女を淫靡にしているのだろう。

だがもう手遅れだった。

どうしようも出来なかった。

俺は彼女を救うことも出来ずに、極上の快感と共に精液を出しながら意識を失った。





### 3話

目が覚めた。

ぼやける視界に、煌びやかな装飾が目に入ってきた。

「……………」

一瞬どこだかわからなかったが、すぐに思い出した。

エルミアの寝室だろう。

俺は最高の快楽と引き替えに、彼女を淫魔にしてしまったのだ。

いったいこれから、俺も彼女もどうなるのだろうか……………。

考えてもわからない、頭が上手く働かず思考が鈍っている気がする。

それから、身体全体に感じるこの違和感。

今寝ているベッドやこの部屋が一回り大きく感じられ、身体も軽い気がする。

俺は……………。

なぜか自分の事を“俺”と言うのが気恥ずかしい感じで落ち着かない……………。

僕は自分の身体を見回してみた。

自由に動くし、外傷もないのだが、明らかに今までの見慣れた物ではなかった。

小さい……………。

まるで、縮んでしまったように感じる。

いや、これは確実に小さくなっている。  
さつき感じた違和感は自分が小さくなったことによるものなの  
だろう。

ばかな……！

そんな事があるはずがない！

ベッドの上で上半身を起こして今一度自分の事をよく観察した。  
さつきまで身につけていたはずの服はぶかぶかで、少し筋肉が付  
いていたはずの腕も華奢な少女のような物になっている。

ズボンの中の自分の一物も確認した。

……大事な部分に毛が無い。

明らかにサイズも小さくなっている。

ここまでみれば、自分が小さくなったと言うのはもう否定のしよ  
うが無い事実だった。

なぜこんな事になっているのか？

誰がこんな事をしたのか？

考えられるのはエルミアさんが何かしたと言うことだけだった。

思考を巡らせていると、この部屋の扉が開く音がした。

視線を移すと、緑と白の胸の部分が大きく開かれたシースルード  
レスに身を包んだエルミアさんが居た。

目が合うと、彼女は満面に喜びの表情を浮かべ足早に僕のベッド  
へと近づいてきた。

歩く度に、たゆんたゆんと揺れ動くおっぱいに目が釘付けになる。  
その姿を見て自分の顔が紅潮していくのがわかった。

僕は淫魔ハンターであるはずなのに、これではまるで女性に耐性  
がないうぶな少年の反応だ……。

エルミアさんはそのままベッドの上に乗ってきた。

大きい……。

互いにベッドの上に座っているのに、彼女の方が自分より頭一つ大きい。

彼女は僕をじいっと見据えたまま微動だにしない。

「エルミア……さん？」

不安を隠せず、下から彼女を見上げるようにしておそるおそる訊いた。

「ア、アレク君っ……！！！」

とたんエルミアさんはそう僕の名前を呼び、頭を両手で抱えるとその大きな胸の中に包みこんだ。

「う、うむう　　！」

おっぱいの間に自分の顔面が挟まれ、柔らかい感触と共に彼女の匂いをいっぱい吸わされる。

「アレク君……かわいすぎます！　……………食べたい、ああ食べてしまいたいです！」

エルミアさんは恐ろしい謔言を呟きながら目一杯おっぱいを押しつけてくる。

彼女の力が強すぎて息を吸うのがやっとで抱擁を解くこともできない。

なすがままにされ、酸欠で気を失いそうになってようやく彼女は胸から解放した。

「う、ごめんなさい……私、アレク君がかわいすぎて自分を失っていました」

「エルミアさん……これはいったい？ 僕の身体をどうしたんですか？」

エルミアさんはまだ僕の身体を完全には離してくれていない。彼女の両腕の中から、見上げるようにして尋ねた。すると彼女は、にやつとした笑みを浮かべた。

「アレク君……もう気が付いたかと思いますが、あなたの身体を少年時代まで若返らせました」

やはり、エルミアさんの仕業だった。

「な、なんでそんな事を？」

「忘れちゃったんですか？ 私とあなたが出会ったのはその時代なんです。私に取って少年時代のアレク君は初恋の人で、それに生涯結ばれたいと思っていた理想の人でもあるんです。だから禁術を使いました。もうこれからアレク君が歳を取ることはありません。私達エルフや妖精達と同じ時間を死ぬまで一緒に過ごして貰います」

「そんな勝手な……」

「……アレク君は淫魔ハンターなのに私より早くイってしまいましたよね？ 敗北は服従を意味するはずでは？」

「それは……」

エルミアさんにそう言われれば、僕は言い返すことは出来なかった。  
淫魔との戦いで敗北すると、その淫魔に一生服従する呪いがかかる。

いくら命令に背こうとしても、その呪いには絶対に逆らえない。  
負けた淫魔ハンターが一生淫魔の性奴隷になる、なんて事も少くないのだ。

この世界の掟みたいなものだった。

エルミアさんはいくら淫魔の卵とはいえ、淫魔であることにかわりはなかった。

だから彼女より先にいき敗北した僕はもう逆らえないのだ。

「うう……」

自分の情けなさど、彼女を救えなかったと言う悔しさに感情が抑えきれず目に涙が溢れてきた。

「ア、アレク君……！」

エルミアさんはそんな僕をすぐに抱きしめた。

それはまるで泣いている息子をあやす母親のようだった。

「そんな顔しないで下さい……もう淫魔と戦う必要も無いんです。私とずっと一緒にいましょう……」

彼女の体温は僕の心を落ち着けていくようだった。

この人の元で一生過ごすのも悪くないかもしれないと思った。

「アレク君がいっぱい気持ち良くなって幸せになれるようにしてあげますから」

しかし、やはり彼女は淫魔だった。

おっぱいの間から見たその表情には、母親が息子に決して見せることはない肉欲の色が浮かんでいた。

また扉が開いた。

複数の人がこの部屋に入ってくる気配がする。

とっさに彼女を突き放し、そちらを見やった。

そこには僕がここに来るまでにイかせたはずの、ダークエルフ、ドライアド、エルフィンのお姉さん達が僕を見据えて立っていた。

「あら、ずいぶんとかわいらしくなってしまったのね……。まあそちの姿も私の好みだけど」

「か、かわいい……。木の根で縛り上げたい」

「うふふ、さつきいかせてくれた分今度は私がいっぱい気持ち良くして差し上げますから覚悟して下さいね？」

彼女達はまだ本格的な淫魔にはなっていないようだが、言動を見るにそれ並みに発情している。

「もう……。アレク君。私を突き放すなんてひどいですね。でも、いくら突き放そうとももうずっとあなたの近くから離れませんよ」

唾然としている僕の身体を、エルミアさんが後ろから捕まえた。今度は後頭部がおっぱいの谷間に包まれた。

胸の前で交差された腕は、力強く僕のことを押さええている。

「……………！ エルミアさんこれはどういうことですか!?!」

とっさに訊いた。

「彼女達は私の友人達です。あなたを捕らえるのに協力して貰いました。そして…………アレク君の淫魔になりたがっている人たちでもあるんですよ」

「そうよ…………坊や、さっきは私にお預けするんですもの…………早く私の中に精液をちょうだい」

「おっぱいとお腹にいっぱいかけて貰うのも気持ち良かったですけど、やっぱり中に出して貰うのが一番素敵ですものね」

皆、口々に好きなことを言っている。

エルミアさんは彼女達も淫魔にしろというのだろうか？

「エルミアさん…………さっき僕に、もう淫魔と戦う必要は無いつて言っただじゃないですか…………?」

彼女の言葉を思い出して質問した。

「確かにそう言いました…………。なぜならもうアレク君と私達とでは“勝負”にならないんですから…………」

エルミアさんがそう言うと、みなくすくすと笑った。

そして「だからもう戦う必要はないんですよ」と言った。

その言葉に僕は少しむっとなった。

勝負にならないとまで言われては、今まで淫魔ハンターをしていた身からすれば納得出来ない。

彼女が服従の呪いを使い負けさせるような命令を下せばそうなるかもしれないが、彼女達は僕自身の実力が取るに足らないものだと見なしているように思える。

それにぎりぎりだったといえど、3人には一度勝っているのだ。するとエルミアさんがこんな提案をしてきた。

「もし、今からアレク君が自分がいくよりも先に1人でもいさせることが出来たらこの場所からあなたを解放し、呪いも解いてあげます」

「……！」

それは突然のチャンスだった。

「エルミア、そんな約束していいの？」

「ええ、必死になって頑張るアレク君もきつとカワイイですから」

「確かにそうね。じゃあ坊や……最初は私を相手にしてくれるかしら？」

「ダークエルフさんがそう言い、他の2人もベッドの上に乗ってきた。」

「アレク君頑張ってくださいね」

エルミアさんは僕を拘束から解放した。



「ふふ、坊やに有利な体勢でやらせてあげるわ……。さあ後ろから私を存分に犯しなさい」

ダークエルフさんは服を取り去ると僕の方にお尻を突き出して四つん這いになった。

しめた……。

エルミアさんは僕に不利になるような命令はしてこないし、ダークエルフさんも油断しきっている。

何とかなるかもしれない。

僕はぶかぶかの自分の服をすっくと脱ぎ、全裸になった。

見るからに頼りない華奢な身体が露わになる。

エルミアさん達はそんな僕の身体を見てうっとりとしていた。

ダークエルフさんの近くに移動する。

「……っ」

近くで彼女の身体を見て思わず息を呑んだ。

自分が小さくなったことにより、彼女の豊満なボディがいつそう魅力的に映る。

肉感的なお尻は僕の2周りほど大きく、重力に従って下を向いているおっぱいも見える。

うっすらと汗ばんだ褐色の肌がいやらしくてかきをおび、下着は既に愛液に滲んでいた。

その様子を見ているだけで自分のペニスがびくびくと反応し勃起していった。

「ふふ、アレク君早くそのかわいいおちんちんで貫いてあげないと可哀想ですよ？」

「坊や……私のおまんこに挿れてぐちゃぐちゃにして……」

僕は周りにながされるようにして、ダークエルフさんの下着をゆつくり脱がした。

目の前に毛の生えていない、涎まみれの肉の割れ目が露わになった。

物欲しそうに時々ぴくぴく動き、愛液をふとももの方まで滴らせている。

それを見た自分の興奮は、以前の比ではなかった。まるで生の女性器を初めて見た時のような感覚だ。

小さくされたことにより、これまでの淫魔ハンターとしての経験値も全部退行していったのだとその時わかった。

精神も身体の方もおそらくまるで耐性がないのだろう。

こんな状態で、小さくされる前にぎりぎりの戦いをしていた彼女達を相手にしたらどうなってしまうのかは目に見えていた。

今なら彼女達が勝負にならないと余裕の笑みをしていた事も納得出来た。

でもここまで来たら引くに引けない。

実力だけで考えれば結果は分かきつっているかもしれないが、彼女達は油断をしているし、僕は一度戦い彼女達の弱点を把握している。

それにもう2度とこんなチャンスはないかもしれない。

僕は覚悟をきめダークエルフさんのお尻に片手を置き、自分のモノをあてがった。

くちゅりと愛液が音を立て彼女の体温を感じる。

「ああんっ……感じるわ坊やのモノを……」

「うっ……」

まだ入り口に触れただけなのだが、体温とぬるぬるの液が僕に未知の刺激を送ってきた。

ペニスがびくつと震える。

ここに挿れたら終わりだというのは火を見るよりも明らかだが、挿れたいという誘惑に勝てない。

弱くなった精神が、快楽を感じたいと思う僕の心が、身体を突き動かしていく。

亀頭が入り口に入ると、僕はそのまますぶずぶとダークエルフさんの奥まで挿入してしまった。

「あっ、やっと入ってきたあ……んっ坊やのおちんちん……」

彼女は甘い声を上げた。

「どうですかアレク君……彼女の中は？ はやく私と同じ淫魔にしてあげて下さいね」

エルミアさんが僕の事をのぞき込みながら言った。

他の2人もベッドの中央でダークエルフさんと繋がった僕をみながらくすくす笑っている。

「うっあっ……きもちいい……！」

僕はうめき声を上げ快感に翻弄されていた。

自分のペニスは小さくなったはずなのに、ダークエルフさんの膣はそれに形を合わせるようにぴったりと肉を吸い付かせ、それどころかきゅつきゅつと締め付けてくる。

そして暖かい体温とぬるぬるの感触が動かなくても、僕を絶頂へ向けて進ませていく。

このままではこちらが消費するだけだ。

そう思い、反動を覚悟でゆっくりと腰を動かしてみた。

彼女の張りのあるお尻の上に手を置き、引き抜く方へ動かす。

中でいくつもあるひだが、竿を亀頭を舐め上げるように擦ってくる。

奥へ挿れるとまた同じようにそれが刺激を与え、もっと奥へとペニスを引き込むように蠢く。

「くう、こんなの……！」

耐えられるわけがない。

「んんっ、あっ……あっ」

ダークエルフさんも感じているようだが、圧倒的に僕への快感のが多いに決まっている。

しかし攻めあげる様に腰を振ることも出来ない。

「ふふ、かわいいですよアレク君、快感を必死に耐えているお顔が……」

「ああ、うらやましいわ……」

「そうですね。とっても気持ちよさそうですね……」

僕達の様子を周りで見ている彼女達が呟く。

「くそっ……っ！」

僕はダークエルフさんの弱点であるおっぱいを攻めるため、彼女に覆い被さり一生懸命腕を伸ばしておっぱいを掴んだ。

「ふあっ……いいわ坊や……もっと、好きだけおっぱいもおまんこも味わっていいのよ」

彼女は喜び媚声を上げた。

彼女のポリユームのあるおっぱいの肉は、とてもじゃないが自分の手では掴みきれない。

手のひらに乗せるように掴んだそれをむにむにと揉む。おっぱいは波打つようにたぶたぶと揺れ動いていた。

「はあっ……！ はあっ……！」

失敗だった。

自分の頭の中には魅力的なおっぱいの感触が刻まれ、息が詰まるほどに興奮をあおる。

もう何が何だかわからない。

僕は自分の制御をうしなって思わず彼女のおっぱいを力強く掴んでしまった。

「ひゃあんっ……！」

その瞬間ダークエルフさんがかわいらしい声を上げ、それに合わせて膺の中がきゅっつと絞まった。

「ひっ……あっ！」

彼女の中で嫩なぶられた自分のペニスから、射精とも思える感覚と共に我慢汁が飛び出た。

「だ、ダメっ、だめえっ!!」

もう耐えれないと感じ身体を起こし、反射的に彼女の中からペニスを引き抜こうとした。

むにい

しかしそれは何かによって阻止された。

「だめですよー。おちんちんを抜くのはいけません」

僕の後ろにはいつの間にか裸になったエルフィンさんがいたのだ。彼女は背後から脇の間に手を入れると、生のおっぱいを背中に押し当て体重を押しつけてくる。

そうされると引き抜く途中だったペニスがまたダークエルフさんの膣の中に戻された。

「は、はなしてくださいっ！」

「うふふ、やです。精液が出そうなら出してしまえばいいんです。彼女もそれを望んでいるのですから」

エルフィンさんは暴れる僕の身体を簡単に押さえながら、耳元で囁いた。

そして、後ろから僕を抱え強制的に腰を振らせ始めた。

ぬちゅ、ぬちゅ

そのせいで激しくペニスがダークエルフさんの中に出たり入ったりする。

自分のペースで行えないことで、予想外の方向から快感が襲いかかる。

「うああ……んっ、んん！」

僕を後ろから包みこみ柔らかいおっぱいを押し当てるエルフィンさん。

ペニスを受け入れ、お尻を揺らして求めるように押しつけてくるダークエルフさん。

耐えるなどという考えも吹き飛んだ。

「だ、だめ、……いく、い……イクうつ　　！！」

どぴゅどぴゅどぴゅ　　！！

ダークエルフさんの中に僕の敗北の証がたつぷりと注がれていく。彼女を淫魔にする精液が、膣内で震え暴れ回るペニスの先から次々に出て行く。

「ああっ、あああんっ………いい！　精液が中で出てるのが気持ちいい！」

ダークエルフさんはそれを感じ取ったのか、ひときわ激しい嬌声を上げながら精液を享受していた。

「もっといっぱい注いであげてください」

エルフィンさんは、腰が砕け立っていることがままならない僕の身体を支えながらもっと出させるようにダークエルフさんのお尻へと押しつける。

そのせいで僕はダークエルフさんの腰を掴んだ状態で、膣の最奥に射精させられた。

尿道にある一滴まで出し切るとようやく、エルフィンさんは僕を解放してくれた。

力を失った僕は、そのままベッドに倒れ込んだ。

ダークエルフさんも事切れたようにベッドに横になっていた。

「じゃあ私の番ね……」

そして、今度は仰向けになった僕の身体をドライアドさんが跨いだのだった。



## 4話

「うう、待って下さい……僕、今出したばかりで」

僕は仰向けのまま、視線を上げてドライアドさんに訴えた。

「いやよ……あんな交わりを見せつけられたら1秒だって待ちたくないわ」

達膝の状態で僕の身体を跨いでいるドライアドさんが言った。

「そんな……」

「そ、そんな目で見てダメっ！ 私の事も淫魔にしてくれなきゃ」

彼女は僕の訴えを聞かず、跨いだ状態のまま僕のパニスを掴んだ。

すべすべの手に掴まれると、再びじわじわと血液がそこに集まってゆく。

「あっ、どんどん大きくなって……」

彼女はそれを小刻みに擦りながら自分の秘所へと導く。

くちゅっ

パニスの先がそこに触れると、受け入れる準備が出来ていると言

わんばかりにぬめった音がした。

「ふふふ、覚悟してね」

そう言っつて、彼女は腰を下ろしていった。

にちゃっとした肉の割れ目に再び自分のペニスが飲み込まれていく。

互いに大事な部分に毛が生えていないため、その様子が丸見えだった。

「あうあつ……」

亀頭の先から根元の方へと、暖かいドライアドさんの膣に絡まれる感触に思わず声が出る。

彼女も、呼吸を乱していた。

ずぶずぶと腰が沈んでいき、とうとう根元の先までもが啜え込まれた。

「んっ……どうアレク君私の中は？」

ドライアドさんの膣内は肉の壁が複雑にペニスに絡んできていた。そしてうねりが僕のペニスを舐めるようにして攻め上げる。

そんな魅惑の感触に、少年になってしまった僕が耐えられるわけもなくすぐに果ててしまいそうだった。

「うあ……ぬ、抜いて下さい……っ！」

再び自分の危機を感じた。

彼女をイかせなければならぬのに、この体位では何も出来そうにない。

腰の上に載せられた彼女のお尻からは彼女の体重が押しつけられ、ふとももが僕の細い腰を挟み込んでいる。彼女の身体の下で身をよじった。

「暴れちゃだめ。おとなしくしなさい」

ドライアドさんがそう告げると何かが僕の足の動きを封じた。足首の辺りに、すべすべとした感触のものが巻き付いている。それは木の根だった。

ベッドの上に突然召喚されたように現れたそれが僕の両足に巻き付き、軽くハの字に開かせ拘束してくる。

「うう……な、なんなんですか？」

そう言つと、ドライアドさんは得意そうな顔をした。

「アレク君が暴れるからいけないのよ？」

さらに腕のほうにもそれが現れ、両手を拘束した。

肌触りがよく力加減も絶妙なので痛みは感じないが、僕は手足をX<sup>へ</sup>字のように拘束され動かせなくなってしまった。

拘束が終わるとドライアドさんは、僕の胸に手を突いて顔をのぞき込んできた。

「今から拘束されながら一方的に快楽を与えられる気持ちよさを教えてあげる」

にやっと笑つとゆっくりと腰を上下させ始めた。

ぬちゅっ

引き抜く時も、迎え入れる時も絡みついている褰がぬるぬるの感触と共に僕のモノを甚振る。<sup>いたぶ</sup>

少年まで退行させられたペニスに、受けきれないほどの快感を与えてきた。

「うううっ……」

ドライアドさんは下に組み敷いた僕のことをにやにやと眺めながら腰を動かしていた。

「ねっ、気持ちいいでしょ？ んあっ……アレク君は何もしなくていいから……」

彼女は腰を振り続けながら、交わりにだんだんと夢中になり喘ぎ声も大きくしていった。

「あっ、あぁっ……あん、あんっ！」

僕の上に付いた手を支点にして腰をゆり動かす。

たぶん、たぶんとお尻の肉が何回も何回も腰に押し当てられる。

その感触は僕の興奮を高めてゆき、ペニスへの快感も高める。

「あうううっ……」

ドライアドさんの下で僕は情けない声を上げていた。

このまま快感を受けいれ、射精してしまえば楽になれるのだろう。だが、こんな風に好き勝手にやられている場合ではない。

彼女を淫魔にするわけにはいかないし、イかせられれば呪いも解

かれチャンスが出来る。

僕は情欲に埋め尽くされそうになる頭で、なんとかそのことを思いだし彼女を責めてみた。

手足を動かせないが、まだ胴体を拵るひねぐらいは出来る。

僕は下から彼女のことを突き上げた。

「やああんっ………！」

ドライアドさんが先とは違う、快感を与られていると取れる嬌声を上げた。

その声を聞いて僕は何とかなるかもしれないと思い、また必死に腰を突き上げる。

「ふあ、あああっん………！ アレクく、んっ………！」

彼女は明らかに感じていた。

突き上げることで跳ね返ってくる膣の感触に、自分も不利になるが万が一の望みをかけて必死になった。

「だ、だめ………！ うごいちゃだめ！ 私にされるがままでいなきやだめ………！」

だが彼女はその行動を許さなかった。

「うっ………！？」

さつきと同様に木の根が、今度はお腹に巻き付けられた。

それに加え僕の腰を挟み込んだふとももをぎゅっと締め付けてきた。

肢体が完全に動かせなくなってしまった。

これではもう突き上げて抵抗することも出来ない。

彼女の言った通りされるがままになるだけだ。

僕に残された事は、彼女が自分で快感を感じ自滅してくれるのを待つだけ。

しかし少年に退行し、主導権を握られた状態ではどちらが先にいくのかは目に見えていた。

「うふふ、アレク君の頑張る姿も絶望したお顔もカワイイです」

「んあ……そうですね。私と交わる時も、あんな風に頑張っただけから突き上げて欲しいです……」

その様子を隣で見ていたエルミアさんとエルフィンさんがクスクスと笑った。

さらにエルフィンさんにいたっては、僕の顔の隣で自慰を始めていた。

彼女は股を惜しげもなく開いた状態で、秘所に指を差し挿れられていた。

愛液のついた指がピンク色の肉の裂け目に出たり入ったりし、それに合わせてくちゅくちゅとした音が聞こえてくる。

彼女からは頭をぼうつとさせるふわつとした香りが漂っていた。

僕は顔を傾けたままぼんやりと、厭らしく自慰をするエルフィンさんの様子に気を取られた。

「っ！ ア、アレク君……私と繋がっているのに他の人に気を取られるなんてひどい！」

すると、エルフィンさんに気を取られていた僕のことをドライアドさんが怒った。

彼女はその感情をそのまま交わりにぶつけ、さっきよりも膣の中

を締め付け、腰のペースを速めた。  
絡みつく膣肉にペニスが攻め上げられる。

「あうう……ご、ごめんなさい……」

僕はとっさに謝り、彼女の方に向き直った。

そう言つと彼女は顔を赤らめ、すぐに機嫌を直した。

「じゃ、じゃあちゃんと私もアレク君の淫魔にしてね」

と言い、ひたすらに腰を振り続けていた。

ドライアドさんから送られる快感に翻弄され、反撃も出来ないまま絶頂にむかつて確実に近づいてゆく。

こんな状況では、もう彼女を先にイカせることは叶わないのだと悟った。

突然、何かが僕の頭の上を覆った。

見上げるとそこには、エルフィンさんが僕の頭を膝建ちで跨いでいた。

「ふふふ、アレク君のかわいいお顔を見ていたら我慢が出来なくなつてしまいました。見て下さいこんなに……」

エルフィンさんは僕の目の前にある裂け目を指で押し広げた。

その中はピンク色の血色の良さそうな肉が蠢き、彼女の体液でぬらぬらとぬめりを帯びていた。

そこから溢れている液は、彼女の股下をつたいふとももに達する。無毛のその淫猥な光景に思わず息を呑む。

「しつかり舐めて気持ち良くして下さいね？」

そう言って彼女は、僕の頭に手を乗せ秘部を顔に乗せてきた。

「む、むぐう　　！」

エルフィンさんの秘部が僕の口と接吻を交わすように押し当てられる。

さらに重量感のあるお尻が乗つけられ、むちつとしたふとももが僕の両頬を挟み込む。

頭部が完全に彼女の下半身に包まれた。

声を出すことも顔を動かすこともできず、彼女に包まれたまま存分に体液と妖しい花の匂いを味あわされる。

「ふあっ……アレク君の息がかかって気持ちいいです……。早く舐めて下さい」

頭が恍惚となり、何も考えられなくなってゆき言われるがままそこに舌を這わせた。

舐め上げると彼女はびくっと動き、身体の中には濃い花の蜜が広がった。

その蜜は舐めれば舐めるほど次々に分泌され滴るので、口の中に次々と入り込む。

入り込んでくるものを拒否することが出来ず、口の中に侵入した彼女の体液は自分の唾液と混ざり、いつしか喉を通って胃に落ちる。すると身体がどんどんと熱くなってゆき、自分のペニスがさらに硬度を増していく。

彼女の蜜はまるで、濃い媚薬のようだった。

「んあぁっ……アレク君のが私の中で大きくなって震えてっ……！」



その媚薬によって自分のモノがドライアドさんの中で暴れ狂うようにビクビク脈打つ。

それは快感を逃がそうとする動きなのだが、彼女の絡みつく膣肉に包まれているのでよりその絡みつきを深く味わうだけだった。

「んむうう　　! !」

その感触に思わず自分の舌の動きが止まった。

快感に腰ががくがくと震える。

いよいよ射精までの猶予がなくなった。

「んあっ、だめっ……もっと……もっと……もっと舐めて、私の蜜を舐めて下さい……!」

舌の動きが止まったことで、エルフィンさんが切なそうな声を上げながら僕の頭に腰をすりつける。

その動きによって僕はまた意識をそちらに奪われ、舌を這わせた。

「んっ……んんっ……そ、そうです……たっぷり淫気のある蜜を味わってください……」

エルフィンさんが満足そうに言った。

すると再びペニスに意識を戻させるようにドライアドさんが腰を捏ねくり回した。

「あぁっ……アレク君っ……アレク君の精液が、欲しいの!」

エルフィンさんの股に視界を奪われ見えないが、ドライアドさん

が僕の乳首さわさわと弄りはじめた感触がした。  
それは何とも言えない切なさを与えてきた。

もう限界だった。

これ以上の攻めに耐えられない。

「んんんんっ

！！」

びゅるびゅるびゅるるる

！！

エルフィンさんの下でくぐもった呻き声を上げ、何も出来ないままドライアドさんの膣の中に出してしまった。

身体が拘束されていなければ、快感にのたうち回っていただろう。だが両手も両足も胴体も腰も、はたまた頭までも動かせない状態でそれは出来なかった。

そうして快感を逃がせないまま僕は、この小さくなった身体に有り余るほどの快楽を与えられていた。

「あああああっ　　す、凄い……中にどんどん出てくる！　アレク君の、おちんちんからびゅるびゅるって！」

ドライアドさんは膣に注がれている精液を感じ取り、嬌声を上げながらそれをもつと欲するように小さく腰を揺り動かしていた。

膣内では精液を吸い上げるように襞が蠕動ぜんどうし波打っていた。

僕はその動きに惑い、ただ精液を捧げていた。

十分に絞り切ったドライアドさんはペニスをようやく秘所から解放し、エルフィンさんも僕の上から退いた。

木の根による拘束も解かれ、ドライアドさんはダークエルフさんの時と同じようにベッドの横に倒れ気を失った。

「はあ……はあ……」

僕は肩で息をしながら、新鮮な空気と身体が自由になった開放感を味わった。

しかし身体が自由になったとは言え、度重なる射精の連続で動こうとする気も起きなかった。

「あつ……ごめんなさいアレク君のお顔が私の蜜でいっぱい」

横に退いた、エルフィンさんが僕の肩に手を乗せ四つん這いの状態で頬を舐め始めた。

普段舐められることのない、頬へのその感触に鳥肌が立つ。

「あう……」

僕は否定する気力もなく、それを受け入れていた。

頬を舐めると次は口の周りを、鼻の頭を、関係無いと思える耳たぶまでも舐め上げ満足そうな顔をし、こう告げてきた。

「じゃあ今度は私ですね……。最後になってしまいましたけど頑張ってくださいね」

妖しい微笑みを浮かべながらエルフィンさんは、ぺろりと舌を出した。

その豊満な身体は既に汗ばんでいた。

「も、もう無理です……！ ぼくもう精液なんて出そうにないし、体力もないです」

休憩も挟まずにはじまろうとする、エルフィンさんとの交わりに僕は弱音を吐いた。

「やですよ。さっき舐めて貰いましたけど、私はまだイってないですし、精液を貰ってもいいんですから」

エルフィンさんはちょっと強めにそう言い、僕の上へのしかかった。

ペニスが彼女の秘所と自分のお腹に挟まれる。

裏筋に割れ目がぴったりと合わせられる。

「うう……」

そうされると萎えていたはずの肉棒が少しずつ力を取り戻してゆく。

もう何も出ないはずなのに、彼女の柔らかい女性の感触に無理矢理に高められる。

「そうです……早く私の中に挿れられる位大きくして下さい」

エルフィンさんは僕のお腹に手を突いた状態で、腰を前後に動かし愛液を擦りつけ素又を始めた。

「あう……やめて下さい……大きくなっても、もう出ないんです。無理なんです……」

そう言つと僕のあごに何かが触れた。

「悪い子ですね。アレク君の淫魔になりたくて精液を欲しがってるの」……」

それはエルミアさんのしなやかな手だった。

「大丈夫です私がまたいっぱいゅっぴゅって精液を出せるようにお手伝いしてあげますから」

彼女は僕の頭の上で反対を向いた状態でのぞき込むように言った。

そして掴んだあごを上に向かせると、そのまま頭を下げ唇を奪った。

「うむう　！」

口内に彼女の舌が差し挿れられ、僕の舌を嫩る。

ぬらぬらとそれは口の中の唾液をすくい取ってゆくように動かされた。

ぴちゅぴちゅと唾液が混ざる音がする。

エルミアさんはそうして僕の口の中から体液を吸い取ると一旦離れた。

その後彼女はベッドの側に置かれた細長いワイングラスの中に、口に溜まった唾液を注ぎ始めた。

僕とエルミアさんのどちらのものかもわからないそれが、にちゃっと開かれ糸を引いている口から滴り落ちる。

淫猥な光景だった。

それを注ぎ終わると、今度はエルフィンさんの前にそのグラスを差し出す。

エルフィンさんも意図を理解したように、にやつと笑いながらそのグラスの中に自分の唾液をゆっくり落とし落としていく。

そうして3人の唾液が混じり合ったその中に、次に小さな小瓶に

入った薄紫色の液体を入れた。

「ふふふ、アレク君これがなんだかわかりますか？」

エルミアさんが、妖しく微笑みながら訊いてきた。わかるわけがなく黙っていると彼女言葉を続けた。

「これはね、とーっても濃い花の媚薬なんですよ？ みんなの唾液も入っているからその効果は倍増します」

エルミアさんが片手に掴んだグラスをくるくると回す。中の液体はすべて溶け合っけてゆき均一になった。

「今からこれをアレク君に飲んで貰います。でも抵抗してこぼしちゃうたらもつたないから特別に口移しで飲ませてあげます」

そう言った後、エルミアさんはグラス傾け一気に中身を口に含んだ。

唇の間から溢れ出たそれが、彼女のあごを伝い服にこぼれ落ちる。そして彼女は僕の肩を掴み、たっぷりと媚薬が入った唇を近づけてきた。

「い、いやだあ……！」

僕はとっさにエルミアさんを押し返した。

しかし精を絞られた身体では本来の力も出せず、彼女は徐々に近づいてくる。

さらに僕の手首をエルフィンさんが掴んだ。

「だめですよ。せっかくエルミアさんが口移しで飲まそうとしてい

るんですから暴れちゃダメです」

優しく微笑みながらも、もの凄い力で捕らえられた。

僕はそれでも迫ってくるエルミアさんの事を否定し、いやいやと首を振った。

だがその動きも、頬に手を添えられる事で封じられた。すぐにエルミアさんの深い口付けが再びはじまった。

「んむっ　　！！」

むちゅっとならされた唇の間から、とろとろとした媚薬が注がれ始めた。

さっきは僕の口内の唾液を嚙って行ったのに、こんどはその逆にとろとろとした液体を注いでくる。

僕は口の中に溜まっていくそれを、なすすべもなくごくごく喉を鳴らして取り込んでいった。

するとエルフィンさんの蜜を飲まれたときと同じくらい身体が熱くなってゆき、血液が滾るたぎような感覚に襲われた。

エルミアさんは、それを注ぎながらもキスも楽しむ様に舌を絡ませる。

溢れた液は頬をつたった。

「あっ……大きくなってきました」

股下に僕のペニスを挟んでいたエルフィンさんが嬉しそうな声を上げる。

彼女はその感触を確かめるように素又をする。

「あっ、んっ……いいです……敏感な部分がこすれて」

彼女の割れ目に挟まれたペニスは裏筋と亀頭を満面に刺激される。もう完全に勃起しきったそれは鈴口から快感の証である先走りをとるところと溢れさせていた。

「そろそろ、いいですね……私の中に迎え入れてあげます」

エルフィンさんは腰を持ち上げ亀頭をペニスにあてがった。

「んんんっ　！」

また自分のペニスが淫魔になる事を望んでいる女性の中に啜えられる。

僕はもう彼女達をイカせることがどう頑張っても無理なのだとわかっていた。

だから挿れられること自体を否定するように両手を伸ばして彼女の身体を掴んだ。

「やあ……お腹をそんなに強く掴んじゃいやです」

僕が掴んだのは、ほどよくお肉の付いたエルフィンさんのお腹だった。

彼女のその言葉に一瞬自分の手を緩めてしまった。

するとエルフィンさんは口角をにやっとなつり上げ、一気に奥まで挿入した。

「むふうう　！」

ドライアドさんとの交わりの時からもうぬるぬるに濡れていた秘所に有無を言わず食べられ、快感の呻きをエルミアさんの口の中



に洩らしながら身体を震わせた。

エルフィンさんはとうとうペニスを自分の中に迎え入れ事に満足なのか微笑んでいた。

「んっ、ようやく……私の中にはいれましたね？」

エルフィンさんの膣はきゅうきゅうと僕のモノを締め付けていた。その締め付けの強さは、ふんわりとした彼女の雰囲気とは真逆で小さな僕のペニスも存分に圧迫する。

さっそく悲鳴を上げたペニスは震え我慢汁を吐き出していた。

「んふふふ……さっきここに来る前は私を組み敷いて犯してくれましたけど、私は男性に跨がって快感を与える方が得意なんですよ」

存分に味わって下さいねと言い、エルフィンさんはすぐさま上下運動を開始した。

みちつと圧迫されながらなので、膣内の肉壁の感触も愛液のぬめりも鮮明に伝わってくる。

それはすぐに直接的な結果となって僕に快楽を押しつけてくる。しかも得意と言うだけあって、僕の様子を覗いながら敏感な部分を読み取りそこを何度も攻め上げる。

彼女は何も出来ないでいる僕を愉悦の表情を浮かべて見ていた。

「んあっ……どうしたんですかアレク君さっきみたいに下から私の事を突き上げて下さい」

エルフィンさんが意地悪くそう言うてくるのだが、もう幾度も続く交わりによって動くだけの体力もなくなっていた。

僕は逆に動きを押さえつけるように彼女の太ももの上に手をおいたのだが、力が入っていないのでそれは何の意味もなさなかった。

「どう……ですか？ さっきまで舐めていたおまんこに、今度は自分のおちんちんが迎え入れられ嫩られるのは？」

その質問にも口がふさがれ答えられず、ただエルフィンさんが僕の上で動くのを見守るしか出来なかった。

むちゅっ んちゅっ

そんな風にエルフィンさんが僕を攻める中、エルミアさんはひたすらに接吻を続けていた。

もう媚薬はなくなってしまったというのに、彼女は舌をぬらぬらと動かし舐っていた。

狭い口内に彼女の舌から逃げる場所など無くずつつと絡ませられる。

媚薬の代わりに彼女の唾液がゆっくりと注がれ始めていた。

「ああ、あんっ……私も凄く良くなってきました……そろそろアレク君の精子が……欲しいです」

エルフィンさんは僕のお腹をやさしく掴み上げながら、相変わらず腰を振り続けていた。

彼女が感じ気持ち良くなっていくのに合わせて膣壁が締めまり、ペニスをぎゅっぎゅっとお包み上げてゆく。

それに加えて執拗に敏感な所を甚振る騎乗位が僕を再び絶頂に導いた。

「ぷはっ で、出る……イク！ また……また、精液が出ちゃうっ  
っ！」

僕はエルミアさんの口付けを振り払いそう叫んだ。

「い、いいんですよ……あんっ！ ……中に、おまんこの中に精液を出して私も淫魔にして下さい！」

「くううっ ……！」

びゅる、びゅるるる ……！！

僕はエルフィンさんの太もみに置いた手を、ぎゅっと押しつけるようにしながら膣内に射精した。

本能的に腰が付き上がり、一番奥で精液を放つ。

エルフィンさんは僕のその動きを喜び、もっと受け入れやすいようにお尻をみっちり押しつけ最奥に射精させる。

この日何度目になるのかわからない精液を、彼女を淫魔にするために出していた。

僕はこれが最後のチャンスだったことも忘れてひたすらに、ただ快楽を味わっていた。

## 最終話

精液を奪い尽くすと、エルフィンさんも他の人と同様にベッドの脇に倒れ込んだ。

僕は射精後の余韻を感じながら、自己嫌悪に落ちていた。

エルミアさんから与えられた最後のチャンスも棒に振り、結局快楽を味わうように皆を淫魔にしてしまった。

しょうが無い部分もあったのかもしれないが、それでも自分がしっかりし自我を保っていたら何とかなったのかもしれない。

「ううう……」

悔しいという感情に蓋を出来ず、自分の目から涙が浮かんだ。

「アレク君……涙なんて流す必要はありませんよ」

エルミアさんの手が頬に触れた。

「でも僕は……結局何も出来なかったんです……」

「そんな事ないです。そんな事言っちゃダメです」

「エルミアさん……？」

「アレク君は私達を淫魔にしなくなかったのかもしれないですけど、私達が淫魔になったからって誰が悲しんだんですか？」

「……………」

「アレク君は私を満たしてくれて、香気も異変も収まったのですよ。もう十分じゃないですか……アレク君はちゃんと異変を解決しました。誰もアレク君を責めたりなんかしないんですよ……?」

エルミアさんは幼い子供を諭すように話してきた。

彼女の言うとおり僕が来たことでエルミアさんは満たされ、異変も解決した。

その結果彼女達は淫魔になってしまったが、それは望んだことだったのだと言っている。

……………。

僕の意味はどうなのだろうか？

僕自身はどうしたいのだろうか？

このままここにいればきっとエルミアさん達は僕を甘やかし、毎日が快楽に染まりきった物になる。

彼女から逃げ、村へ帰ればまた淫魔ハンターとしての生活が待っているのだろうか……。

どうしたいのか……。

それは初めからわかっていたのかもしれない。

僕はエルミアさんの胸に甘えるように抱き付いた。

「いいこ……いいこです。あなたが望むなら……私はお姉さんにでも、お母さんにでも何にでもなります。いくらでもこの胸に甘えていいんですよ?」

彼女は僕の背中をゆっくり擦っていた。

僕の身体は彼女に包まれ、穏やかな気持ちになっていく。

エルミアさんは僕の心を落ち着けるまでじっくり抱擁を続け、その後こう言った。

「だからアレク君も……私の望みを聞いて下さい」

エルミアさんは僕を抱きしめたまま、後ろ向きに身体を倒した。彼女は仰向けに、僕はうつぶせに倒れる。

頭はおっぱいと腕の間に捕らえられた。視線を上げると優しい笑顔をした彼女の顔が目に入った。

「私はこれまでにアレク君に募らせた想いの分、いっぱいいっぱい触れ合いたいです……。アレク君をたくさん感じたいんです」

「エ、エルミアさん……」

「この意味が……わかりますよね？」

そう言った後彼女は身体を半回転させた。くるっと景色が回り、仰向けにされ彼女の身体に覆われた。

「ふふ……ではもっとエッチしましょうか？」

エルミアさんは上半身を起こすと腰に跨がり、僕を見下ろしながら言った。

それは再び自分が精液を絞られる事を意味する。

しかも今度はもう真正銘の淫魔になってしまった彼女とその行為に及ぶことになる。

こうして主従関係が出来た後にその淫魔と行為に及ぶと、じわじわと身も心も彼女のものにされゆくのだ。

僕は恐怖心が隠せなかった。

「大丈夫です……アレク君は私と、ここの皆のことしか考えられなくなるだけですから……」

彼女の片手が髪を撫でる。

「辛いことも、悲しかったことも忘れましょう……ただ私とみんなだけがあなたのすべてになるんです」

「ぼ、僕は……」

「そして私も、アレク君がすべてになります」

エルミアさんは股をのつたりと揺り動かし始めた。

くちゅつと秘部の裂け目にペニスが捕らえられその刺激に硬度を高めていく。

何度も出して硬くなるはずなんてないのに、彼女がそれをすることを望むから僕の身体はもう逆らえない。

「うふふっ……アレク君の準備も、もうすぐ整いそうですね」

エルミアさんは嬉しそうに言いながら、腰の速度は速めずにゆっくりとその動きを続けていた。

僕は下になつたままその動きを、彼女がペニスを愛撫するのを息を熱くして見ていた。

抵抗する気も、否定する気も出てこない。

それが彼女の従者になつたことが原因なのはわからなかった。

「あああ……エルミアさん……」

僕はただ彼女の名前を譚言のように呼んでいた。

エルミアさんは僕のペニスが完全に大きくなってからもねっとりとした素又を続けていた。

彼女の体重が押し当てられればお尻の肉を感じ、擦られれば愛液の滴った秘所の肉を感じる。

ぬるぬるとした体液がお腹にも垂れ、亀頭が秘部に吞まれそうになった瞬間ペニスが期待に打ち震えるようにびくびく脈打った。

それはエルミアさんとの交わりを我慢できないという証拠。

ペニスが僕のおへその辺りに我慢汁の飛沫をとばす。

「ふぁっ……エルミアさんっ！ 気持ちいいです……おちんちんが、びくくって……」

「もう……いい頃合いですね……」

彼女はお腹に飛び散ったその液体を人差し指ですくうと、舌で舐ねぶっていた。

ピチャピチャと音を立てそれを味わうと、腰を上げ僕のモノを秘部の入り口に導いた。

「じゃあ始めましょうか……お互いを感じ合う触れあい……」

エルミアさんはどうとうペニスを体内に挿れ始めた。

ここの寝室に来て、エルミアさんからは始まった交わりはダークエルフさん、ドライアドさん、エルフィンさんと続きましたエルミアさんに1周した。

その1周の間に僕は、皆の膣の中で精液を欲望のままどくどくと出してしまった。



それによって淫魔になった彼女が、また僕のペニスを啜えてゆく。蛇が獲物を飲み込むようにじつとりと。

「ああ……くううっ……!!」

さっきの交わりでも十分に耐えきれないほどの快楽を与えていたのに、また甘美な感触が増している。

前よりもスムーズに啜え込んでいくのに、吸い付いて逃がさないように収縮し締め付ける。

エルミアさんが淫魔になったことで、従者の僕のペニスを攻めやすいうようにと身体が変わったのだらう。

より沢山精液を搾り取るために。

彼女はずつぷりと啜え、僕の腰からはみ出る程のポリウームのお尻をむにむにと押し当てた。

彼女は中に入ったペニスを感じ取るようにその動きを続けた後、嬉しそうな笑みを浮かべ腰を上下させ始めた。

「だ……だめです……！ き、気持ち良すぎて………おかしく、なっちゃうっ！」

エルミアさんの動きに合わせて膣壁が蠕動しながら竿を舐めている。

たつぷりと分泌された愛液がねちよねちよと卑猥な音を立て、自分のモノが彼女の体内なかに入っていると言うことを意識させる。

淫魔の膣の魔性の感触に尻込みしていた。

「あんっ……う、嬉しいです………気持ちいいのはアレク君がちゃんと私を感じてくれている証拠です。」

ああっ……私もアレク君をもつと感じたい！ アレク君も私をもつと感じておかしくなって下さい……！」

エルミアさんは嬌声の混じりにそう言うのと腰を速めた。

僕の胸の上に両手を置き、下半身を妖しく存分に振っている。

僕は与えられる快感に耐えられなくて、彼女の下で身をよがった。

「アレク君……私のことをもつと感じて下さい」

エルミアさんは僕の両腕を掴むと、腰の動きに波打つように揺れているおっぱいに導いた。

汗によってしっとりとしたおっぱいの感触が、手のひらを通して脳の中に伝わる。

魅力的なそれは、手のひらから溢れ出るおっぱいの肉のように脳内をおっぱいで埋め尽くしていく。

「あんっ……さあ、そのかわいいお手でむにむにして下さい……」

彼女は手を重ねたまま、強制的に揉ませてきた。

手を動かす度におっぱいはそれに合わせてむにむにと形を変える。

「ああ……おっぱいが……柔らかい……」

僕は心を奪われ放心していた。

「ふふっ……私のおっぱいは気に入ってくれましたか？」

得意そうに質問をしてくる彼女に僕は首を縦に振って答えた。

エルミアさんはまた嬉しそうにおっぱいを揉ませ、腰を揺するところも忘れなかった。

お互いを感じ合つたための交わりは至極の物だった。  
本当にエルミアさんの言ったとおりで、今僕は彼女の事しか考えられない。

「エルミアさん……きもちいいよお……」

口からは素直な気持ちが出ていた。

「アレク君っ！ か、かわいい………かわいいすぎます！ そんな目で見られたら私……私は……！」

エルミアさんは僕を見つめ、感極まった声を上げると倒れ込んできた。

そして僕の髪の毛をたくし上げると、唇に吸い付いてきた。  
すぐに舌を差し込み僕の舌に絡ませてくる。

彼女の両腕は後頭部に回され、おっぱいはお互いの間でつぶれている。

下向きになり垂れ下がってくる彼女の髪からは、いい匂いが鼻に入り込んで来ていた。

そんなきつきつに密着した状態なのに、下半身だけはしっかりと揺すられていた。

彼女の手に入力が入る度、連動するように膣肉もぎゅっぎゅっと密着してくる。

たまらなかった。

僕のペニスは彼女の中で暴れ狂うのだが、その動きさえも膣が吸収していた。

「でちゃうっ！ 出ちゃうよっ、エルミアさん！ ま、またおちんちんから……精子が！」

彼女の口付けを振り払って、僕は叫んでいた。

このベッドの上で何度も何度も繰り返したその射精。

その精液が出てしまう幸せな感覚がまた僕を覆い尽くしていた。

「はい……！ 出して下さい、私のおまんこに……！ 精子を……アレク君を感じさせて下さい！」

「い、イクっ、いくっ！ いくうー！！」

その瞬間僕はエルミアさんの背中を強く抱きしめた。

彼女もそれに答えるように手に力を入れた。

お尻が密着し、膣が収縮する。

びゅるびゅるびゅるびゅる ……！！

鈴口からどろどろとした液体が進る感覚と共に、もの凄い放出感が訪れた。

膣の奥へ奥へ、子宮の方へと出て行く感覚がわかる。

癒着するように張り付いた膣が精液をねだるように蠕動し、絞り出していく。

僕は彼女に抱き付いたまま腰を突き上げ振るわせていた。

「ああ……す、すごい……さっきよりもたくさんたくさん精子がびゅくびゅく出てます……。アレク君が私の身体なかに入り込んで……」

エルミアさんは射精を続けるペニスを啜えたまま、腰を揺り動か

す。

僕の射精はまだまだ収まらなかった。

「ううう……………」

腰から力が抜け、ベッドに体重を預けてもなおエルミアさんの膣は貪欲に吸い付いていた。

たっぷりのお尻が逃げる腰を追うように押し当てられ、ペニスも膣から解放されず、それは尿道に残った1滴を搾り取るまで続けられた。

「いっぱい出しましたね……………膣の中にアレク君のおちんちんから出た精液がいっぱいあるのがわかります」

「……………」

僕は出しすぎてしまったことと、エルミアさんの口から出た卑猥な言葉に顔を赤くした。

「うふふ……………」

彼女はお腹を愛おしそうに撫でると妖しく微笑んだ。

「じゃあ、2回目を始めましょうか……………」

そして恐ろしいことを告げた。

「えっ！？　そ、そんな……………」

あんな心も、魂も奪われてしまいそうになるまぐわいを彼女はまだ続ける言っただ。

「まだやるんですか!？」

「そうです。アレク君にはまだまだもっともっと精液を出して貰います」

「ぼ、僕もっ、本当に1滴だっ……」

「大丈夫です、アレク君のおちんちはまだ私の腔なかで硬く震えているじゃないですか？」

エルミアさんが膣をきゅっと締め付け腰を拵らせたので、中で敏感になっているペニスがビクツと震えた。

「ふあっ　！　エルミアさん、だめっ！」

そう叫びエルミアさんを押しつけようとした瞬間、僕の手首に何が巻き付いた。

それはドライアドさんが召喚した木の根だった。

「皆さんも起きられたようですから、アレク君が精液をぴゅっぴゅっするのを手伝ってくださいますよ？」

ベッドの上には彼女の言った通り身体を起こした皆がいた。

エルフィンさんも、ドライアドさんも、ダークエルフさんも……みんなが僕ににじり寄ってくる。

「精液でないなんて嘘付いちゃダメです」

「そうよ……あなたにはエルミアとの交わりが終わったらまた私の中に出して貰うんだから」

「うふふ今度は坊やの上に跨がって攻めて上げようかしら？」

彼女達は好き勝手に言い、しかもあと最低2回ずつは中に出さないとのこの交わりを終わらないと言った。

そんなの無理にきまっている。

「大丈夫ですよアレク君。忘れていませんか、私は花の妖精なんですよ？」

エルフィンさんが僕を上からのぞき込むようにして言った。

「私の体液には男の人を気持ちよくして精液をいっぱい出させる効果があります。だからいまからそれをアレク君に分けてあげます」

彼女は僕の頬に手を添えると唇をくっつけた。

互いに繋がったその隙間から彼女の唾液が注ぎ込まれる。

舌を伝うようにとろとろと、重力に従ってどんどん注ぎ込まれる。

僕は彼女の身体と髪から発せられる催淫香を感じながらそれを受け取らされていた。

頭がぼうつと恍惚となつてゆく。

「じゃあ私はこのかわいらしい乳首を舌でなめなめしてあげる」

今度はドライアドさんだった。

彼女はエルフィンさんの反対側に場所を取ると、顔を僕の乳首ま

で下げてきた。

そして乳首を軽く指でつまんだ。  
切なくも気持ちいい感触に背筋が震える。

「男の子なのに、こんなにぴんと立てちゃって……舐めたら美味しそう……」

そう言っただけで軽く指で触った後、ドライアドさんは僕の胸に唇を付け乳首に吸い付いてきた。

「んん　　！」

吸われながら、舌先も使われている。

ぷるつとした唇に包まれ、その内部では唾液の滴る舌が乳首を何回も何回も舐めまわす。

少しざらつき、温度が高く暖かい舌が這う度に振りかかる感触に僕は身を振らせる。

そんな中新たな刺激がまた襲いかかってきた。

「うふふっ、この中に坊やの精子がいっぱい詰まっているのね」

ダークエルフさんだった。

彼女はエルミアさんの後ろに回り、僕の両足を開かせ、股の間についている睾丸を手で擦り始めたのだった。

「むづうう　　！」

精液を出すためにきゅっと縮まっているそこを手で包むと、優しく柔らかく精子をもっと生産させるように揉み始めた。





膣の中では僕のペニスが鈴口から次の射精への準備をし、先走りが洩れていた。

「もうっそんなに暴れちゃだめよ」

ドライアドさんがそう言うと、その言葉とは裏腹に腕に絡ませていた木の根をほどいてくれた。

「私も、ここがうずいて来たの。アレク君、おさめて……」

しかしすぐに右手は捕らえられ、そのまま彼女の身体に挟まれた。二の腕にはおっぱいに挟まれ、手首はふとももに包まれる。そして指は無理矢理彼女の膣内へと導かれた。

くちゅっとした感触と共に指が吸い込まれ、熱く滾ったうねりのある膣壁が感じられた。

「あん……いい。またあとでこの中におちんちんを挿れていっぱい射精させてあげるからね」

ドライアドさんは熱のこもった声で言った。

「んちゅっ……私も欲しいです」

僕に口付けをしていたエルフィンさんが顔を離した。

唇には唾液の糸が引いていた。

すぐに彼女も左手を掴むとドライアドさんと同じように僕の左腕を挟み指を秘所に挿し込ませた。

細い指にも感じられる肉の締め付ける感触が伝わる。

「ここで気持ち良くしてあげますから、私にもたっぷり精子をくださいね」

息を吹きかける様に囁くその誘惑はまた僕の思考を狂わせていった。

「ああ……うう……」

今の状態は木の根による拘束が、女の人の身体による拘束に変わっただけだった。

二人は乳首への愛撫と口付けも再開した。

「やぁん……ゆっくりしてるのに……はぁん……だめです、私も気持ち良くて溢れて来ちゃいます」

僕の上で腰を捏ねくり回していたエルミアさんが叫んだ。

「あらあら、もったいないわね……エルミアの愛液に混じって坊やの精液も出てきちゃったわよ？」

僕自身もそれを感じていた。

エルミアさんのぐちゅぐちゅの秘部から体液が溢れ僕の睾丸、そしてお尻の方を伝っているのがわかる。

ダークエルフさんはふふっと笑うとそれを舌で舐りはじめた。

「ひうっ  
」！

べろべろと睾丸を、お尻と玉の間も、加えてお尻の穴さえも迷い無く舐めている。

下半身の大事な部分が彼女に弄ばれている。

ぴちゃぴちゃとお尻と睾丸の間を下から上へ、時には玉袋を湿った生暖かい口の中に入れていた。

僕はその感触にたじたじだった。

しかしダークエルフさんは愛撫をやめず、あることが指の先をくりくりと僕のお尻の穴に押しつけ始めた。

その侵入しようとしてくる動きに僕は暴れ狂った。

「や、やめてえっ！そこはお尻の穴なのに！」

エルフィンさんのキスをふりほどいて叫んだ。

「ふふ、坊やが悪いのよ？こんなにかわいらしい小さな穴を、舐める度にひくひくって物欲しそうにさせるんですもの……」

「ち、ちが……！僕は欲しくなんて……」

「あら、入れて欲しくないの？」

エルミアさんの後ろにいたダークエルフさんが、エルフィンさんの隣にきて僕を覗いた。

僕は彼女に向けて何度も何度も頷く。

「でもだめ……私が挿れたいから挿れちゃうわね」

ダークエルフさんはそう言うと、いたずらな笑みを浮かべるのだった。

その後僕の目の前で中指を秘所に挿れくちゅくちゅと捏ね回した後それを引き抜いた。

「んっ、ほらっこれで指がぬるぬるになったでしょ？　これならきつと坊やお尻にも抵抗なく入るわ」

彼女はまた僕の下半身の方へと向かった。

あのぬるぬるの指に犯される！

その恐怖に僕はエルミアさんに跨がれながらも、出来るだけ足を閉じた。

「こらだめ、いい子にしなさい？　これからこの指で坊やお尻をいじめてあげるんだから」

だが力の入らない自分の足はダークエルフさんによって簡単にM字に押し広げられた。

ここからでは見えないが、ダークエルフさんが僕のお尻に熱い視線を向けているのを感じる。

思わず意識がそちらに向かう。

脳の指令とは関係なしにお尻がひくひくと脈打つのがわかった。

「やっぱり坊やおも期待してるじゃない？」

ダークエルフさんがうわずった声でいい、その後ぬるぬるの指の感触が伝わってきた。

「やだ、やだあ………！」

僕は目に涙を浮かべ首を振っていた。

「大丈夫ですよ。お尻に指を挿れられるのはとっても気持ちいいんです。でも怖いなら私がアレク君をぎゅっと抱きしめてあげます」

僕の事を見守っていたエルフィンさんが優しい口調で言うと、顔を  
おっぱいの中に包み込んだ。

彼女の甘い匂いと体温が僕の事を包んだ。

「じゃあもういいわね……」

そしてついにダークエルフさんのぬめった指が侵入してきた。  
ぐぐつと入り込んでくる異物感。

痛くはないが、その奇妙な感触に身体を震わせる。

これ以上入らないと感じても彼女はそこをほぐしながら奥へ奥へと  
進ませる。

じつくり時間をかけ彼女の指が完全に僕の体内に入り込んだ。

「くうっ うっくっ！」

どうやって耐えればいいのかわからないその感触に呻きが洩れる。

「すごいわ……私の指をきゅってかわいく締め付けちゃって」

ダークエルフさんがうつとりとした声を上げ中で指を折り曲げた。  
それが身体の中にある敏感なポイントに触れ、身体もペニスも大  
きく震えた。

「やぁん……すごいです……アレク君のおちんちんが今までに無い  
くらい私の中で暴回っています」

ペニスを啜えていたエルミアさんがその動きに歓喜の声を上げた。

「いい……凄くいいです！……もっと、お尻をいじめてあげて下



とてつもない放出感が襲いかかり、いっこうに収まる気配を感じない。

しかも、射精中にもかかわらず誰も僕への愛撫をやめようとしなかった。

乳首も、お尻も、ペニスもそれぞれ思い思いに刺激され続けている。

睾丸にいたっては精液をもっと出しなさいと強制されるように揉まれていた。

「ああああつ　　やあつああ　　おかしく……なつて　　！」

それでも彼女達はやめなかった。

僕の中は快楽一色で精液を出すことしか頭にない。

エルミアさんの膣は吐き出される精液を飲み込んでゆく。

それを受けとっている彼女は愉悦の表情で目を細めていた。

「ふふ……まだこれが終わっても皆の番もあるんですからね……アレク君？」

ぼやけていく視界に映っていた皆は妖しく微笑んでいた。

こうして僕の淫魔ハンターとしての生涯はエルミアさんの寝室で終わりを告げた。

これからは彼女達、淫魔の従者として生きていくことになるだろう。

それが僕の新たな人生……。でもきつとそれも悪くないはずだ。



淫魔の香気 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://novel18.syosetu.com/n5919ch/>

---

淫魔の香気

2016年7月13日16時36分発行